
拾参怪談

松嶋ネコチロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拾参怪談

【Nコード】

N4274M

【作者名】

松嶋ネコヂロウ

【あらすじ】

旧拘置所の廃墟へ肝試しに訪れた十二人の男女。絞首台のある部屋で猫のお面をした少女と出会う。「拾参怪談」になぞられ、十二人の男女と猫面少女はそれぞれ十三の怪談を語っていく。 全編モノローグ（独白）形式で綴っています。

猫面の語り 其の壱 & 1 t ; 挿絵付 & g t ;

あら、こんにちは。

それとももう、こんばんは、と言つべき時間なのかしらね。

どうしたの、みんなしてその顔。そんなに驚かなくなつていいじゃない。

——どうしてこんなところにいるのかつて、それはこつちの台詞よ。貴方たちこそ、どうしてこんな所に来たの？　ここ、どんな場所だか判つてる？

旧拘留所、ここは廃墟なの、廃墟。

それを貴方たち、随分と大所帯で来たのね。

ひい、ふう、みい、よお、いつ——。

あら、十二人もいる。ここは広いからいいけれど、これじゃちょっと息が詰まりそうね。

みんな学生？

——あら、高校生なの。それも一年生。若いわね。

今日はどうしてこんな所に？　あら、そうなの。やっぱり肝試しで来たのね。楽しそうでいいことだわ。

——あたし？

貴女ね、年上に向かつてお嬢ちゃんだなんて失礼じゃないかしら。これでもあたし、とつくに成人しているんだから。

まあいいわ。貴方たち、その辺に適当にお座りなさいな。あたしとお話していきましようよ。せつかく肝試しで廃墟に来たのに、幽霊が出なくて拍子抜けしているのでしょうか。

そうでもない？

それもそうね。ここは居るだけで充分怖いわよね。真夏なのに不自然なくらいひんやりしていて、むしろ肌寒いくらいで。昼間でも薄暗くて避暑にはいいけれど、どうしてか野生の動物はあまり入り

込まない。暗くて居心地が悪くて、そこに居るだけで鬱憤が溜まりそうな場所。

でもね、亡くなった人たちの魂にとってみれば、こういう静かな場所は故郷のようなものなの。

廃墟つてすべからくそうであるべきなのよ。だからね、ちょっと変なものが見えたからって、騒がないであげてね。

——あら、ごめんなさい。今のを聞いて帰りたくなったでしょ。

冗談よ、冗談。ちょっと驚かせようとしただけじゃない。

ね、このまま帰るのもつまらないでしょう。あたしとお話していきましょよ。

そうそう、あたしの後ろをご覧くださいな。

初めて見たでしょ、絞首台つて。しかも十三階段よ。

未だにロープが下がっているのはおかしい？ そう思うのは当然だわね。

このロープはね、あたしが結んだの。どうしてって——そんなの決まってるじゃない。

ロープの掛かっていない絞首台をずっと眺め続けてみたらつて、貴方たち想像してご覧なさいよ。ほら、気がおかしくなりそうだとは思わない？ 絞首台はね、ロープがあるからこそ落ち着くものなの。

分からない？ 例えば、そうね。貴方たちが教室に入って、ふと前方を見ると、いつもは有ったはずの黒板が無くなっているの、どう？ 不安じゃないかしら。

黒板が無いと授業が出来ない、だから不安になる？ あたしはね、そついう意味で言ってるんじゃないの。

これはね、人間の先入観と思い込みの例え話なの。

在るべき場所に有るべき物が無い。在るべきではない場所に有るはずのない物が有る。見慣れた光景の中に些少の齟齬が生じただけで、人間はね、軽いパニックに陥るのよ。

分からないかしら。

人間がまず体外から何かしらの刺激を受けるとき、まず始めにその人の持つている事前知識・固定概念・先入観などから入り、前情報として脳に送るの。物事に疑いを持つのはそのあと。

試しに貴方たち、両親や兄弟の部屋にこっそり入って毎日家具や日用具の位置を少しずつ変えていく悪戯をしてみてもどうかしら。たまにその家族が所有している覚えのないものを置いてみたりもしてみても。決して自分がやったと家族にばらしては駄目よ。

——そう、毎日よ。毎日毎日毎日。

人によって差異はあれど、そのご家族の様子、変わっちゃうんじゃないかしら。普段からそわそわしたり、会話しているときもうわの空だったり、夜に眠れなくなったり、怒りっぽくなったり、突然泣き出したり。

当然よね。自分の見ている風景が少しずつ少しずつ捻じ曲げられていくんだもの。気も変になっちゃうわよ。

でも、実行すること自体は簡単でしょ？ 貴方たちも氣にくわない人がいるなら試してみたらどうかしら。

あはは、冗談よ、冗談。

——あら？

ねえみんな。今の聞こえた？

ガターン、って音。

何の音って、そんなの決まってるじゃない。聞こえなかった？

あたしは今の音、はっきりと聞こえたわよ。

あの絞首台から、ガターンってね。

ここにずっと居るとね、段々よく聞こえてくるようになるのよ。ガターン、ガターン、って。

薄ら寒くなってきた？

あはは、冗談だってば、あれもこれも全部「冗談」。ふふ、貴方たち

本当に面白いわね。

どうしたのよ貴方、そんなに人のこと睨んじやって。

——このお面？

嫌よ。絶対に取らないわ。

だって可愛いじゃないの、このお面。猫ちゃんよ猫ちゃん。狐面ならぬ猫面ねこめんね。

——可愛くない？

何を言っているのよ貴方。猫ちゃんはね、このくらい不細工な細目の方が、愛嬌があつていいものなのよ。大きな目でじつと見つめられることほど、人の繊細な心を追い詰めるものはないの。

分らないかな。もう、分かつてよ。

ところで貴方たち、この時期にこんな所に来たってことは、あれをしに来たのよね。

じゅうさんかいだん
拾参怪談。

ほら、当たり前。やっぱりそうなのね。八月一日にこの旧拘置所とくれば、やっぱり拾参怪談しかないわよねえ。

でもおかしいわね。貴方たち十二人で来たの？ 本来なら十三人で来るべきではなくて？

——ああ、そうなの。本当は十三人で来るはずだったのね。最後の一人は、風邪？ それとも怖くなって途中で逃げちゃった？

何よ、誰も知らないの。仕様がないわね。全く、仕様がな。

あたしが参加してあげるわよ。うふふ、もう、本当に仕様がないわねえ。

なに、あたし、嬉しそうに見える？

あはは、どうかしらね。……え？

——あたしが実は幽霊？

貴方もつまらないことを言うのね。あたしにはちゃんと足があるわよ。身体だって透けていないし、そもそも幽霊が肝試しに来た人間と楽しげに怪談話に興じるのかしら。

ああ、それともあたしの身なりが怪しいのかしら。今のご時世でも着物姿なんて普通だと思うのだけど。確かに生地は黒だけど、ほら、裾のところには白い水玉模様があしらってあるのよ。可愛いでしょ。

——お面？ もう、どれだけ猫面のことを気にするのよ。いいじゃないの、このお面は余興の小道具と思えば。顔が分からない方が不気味さが増して怖いでしょう？

それより、さっさと始めましょうよ拾参怪談。

誰か拾参怪談のやり方、はっきり分かる人はいる？

——みんな駄目ね。あたしが一番詳しいようだから、説明してあげるわ。

一つめ、拾参怪談は同じ部屋にて十三人で行うこと。

二つめ、一人に一本ずつ傍に口ウソクを置くこと。

三つめ、十三人で順番に怪談を一人につき一つずつ語ること。

四つめ、怪談の最中は全員がその話に耳を傾けること。

五つめ、怪談話を妨害するような行為、発言は慎むこと。

六つめ、語り手は怪談を語り終わり次第口ウソクの火を吹き消し、次の語り部を指名すること。

七つめ、拾参怪談が終わるまで部屋から出てはいけない。

これぐらいだったかしら。もつとあつた気がするけれど、なにしろ一年ぶりだからあたしの記憶も定かではないのよ。ごめんなさいね、でもこの中で一番拾参怪談の決まり事を知っているのはあたしでしょう？

その貴方、そんなに恨めしそうに睨まないでちょうだいよ。あたしだって完璧には覚えていないの。あとでまた思い出すからね。口ウソクはあたしが持っているから、決まり事に従って一本ずつ配るわね。

準備はいい？ みんなもう火を点けたわね。

——最初は誰を指名すればいいのかつて？

中々鋭い質問だね。そうね、最初は誰でもよかった気がするわ。せつかくだからあたしに指名させてよ。

何よ、みんなして。どうしてそんなに当てて欲しくなさそうな顔してるのよ。意地悪したくなっちゃうじゃないの。

じゃあ——。

さっきからずっとあたしを見ようとしないう方、織部くん。

——え？

あたしが貴方の名前を知っていて、何か問題があるのかしら。

というかあたし、貴方たち十二人全員の名前、知っているわよ。

そんなに疑うのなら、当ててみましょうか。

噂話が大好きな織部清隆くん。勉強が苦手な松本可奈子ちゃん。

ギターが趣味の矢切京平くん。学級委員長の赤羽吉乃ちゃん。お気

楽思考の石立圭介くん。名家出身の信条あずみちゃん。内気な性格

の古ヶ崎和馬くん。バスケット期待の星の佐野葵ちゃん。腕っぷしが

自慢の島田幹男くん。家族想いの津田明菜ちゃん。悩みの多い牧村

大地くん。絵が得意な小野寺百合ちゃん。

それで、あたしが貴方たちの名前を知っていて、どう不都合があるというのかしら？

——もういいわよ。

あたしを疑うような台詞はもうたくさん。これ以上あたしのことを知ってどうなるというの。さっさと怪談を始めないと夜が明けてしまうわ。

ほら、早く怪談話を聞かせてちょうだい。

ねえ、織部くん

猫面の語り 其の壱 & 1 t ; 挿絵付 & g t ; ; (後書き)

拾参怪談参加者(五十音順)

壱 赤羽吉乃

弐 石立圭介

参 小野寺百合

肆 織部清隆

伍 古ヶ崎和馬

陸 佐野葵

漆 島田幹男

捌 信条あずみ

玖 津田明菜

拾 牧村大地

拾壱 松本可奈子

拾弐 矢切京平

拾参 ?

案内人 猫面ねこめんの女

【巻】となりの自分 ― 語り手、織部清隆

――分かった、分かったよ、話せばいいんだろ。

ええと、さきほどご指名にあずかりました織部清隆です――え？
自己紹介は別にいい？
おりべきよたか

いいじゃん、みんなほとんど一学期の付き合いしかないんだし。
まだお互いのことあまり知らないんだ。いい機会だから怪談話の前
にもう一度お互いを認識しておこうぜ。

――だろ。お前もそう思うよな石立。やっぱりお前は分かる奴だ
よ。それにお前はアホだから、まだみんなの名前を覚えてないんだ
ろ？

――お前は正直者だな石立。お前とは小学校からの付き合いだけ
ど、お前のそういうところ嫌いじゃないぜ。

あ、お前のことはまだ信用してないから猫面^{ねこめん}。どうせ俺たちが
肝試しに来るって聞いてドッキリ仕掛けてやろうって魂胆^{こんたん}だろ。お
前は絶対俺たちのクラスの誰かだ。ま、今はまだ検討もつかないけ
どな。

――ああ、悪い悪い。俺としたことがつい無駄口を。よし、さっ
さと怪談話を始めるか。

えー、おほん。

さっき猫面が言った通り、確かに俺は噂話が好きかもしれない。
というか噂話が嫌いな奴なんているのか？　って感じなんだけど、
まあいいや。

今日用意してきた怪談話も実体験ではなく噂で聞いたものを話そ
うと思っていたんだが、猫面がいきなり俺のことを噂話好きだなん
て言うから、冷めちまった。

つーわけで、ここは俺の実体験での怪談を話そうと思う。結構ト
ラウマだから、あんまり話したくなかったんだけどな。でも噂で聞
いたショボい怪談でせっかくのこの雰囲気^{きふき}を白けさせたくないし。

さつき俺、『認識』って言葉を使ったと思うけど——え、使っていないっけ。いやいや使ったよ、自己紹介の下りでさ。まあ、どっちでもいいけど。

この話は『認識』って言葉に深い関係があるんだ。

さつき俺、『お互いを認識』って言ったけど、お前ら、他人を認識するのに最も重要なことは何だ思う？

——何だよ佐野。別に聞き手に質問を投げかけてはいけないうってルールはないだろ。

さつき猫面が言ったルールは『怪談話を妨害するような言動をしないこと』だろ？ だったらこの質問は怪談を円滑に進めるためのものなんだ。だから聞き手も怪談を分かりやすく円滑にするために語り手に質問をするくらいならオーケーってこと。

だろ、猫面？

——な、猫面もこう言ってることだし、佐野も質問があつたらしいていいぜ。

よし、気を取り直してもう一度質問な。他人を認識するのに最も重要なこと、一体何でしょう。

——相手の顔、違う。

——相手の名前、違う。

——その人のクラスでのポジション、違う。

どれもダメ、全然違うね。

正解は——自分を認識することだ。

納得しているような顔がちらほらあるな。石立は、やっぱり分かってねえか。

いいか、他人を認識するにはまず自分は自分であると認識することだ。一番目に自分がいて、二番目に他者がいる。そもそも自分が自分であることも分からない奴に、他人と自分の判別なんて出来やしないんだ。

自己を認識できない奴なんて居るのか？ みんなそんな顔してるな。

それが居るんだよ。いや、居た——と言った方が正しいか。
俺は中学の頃から、自己を認識出来なくなった奴との付き合いがある。

なあ、石立。中学のときに中澤っていうやつが居たの覚えてるか。ほら、中二の頃に半年間ぐらい学校休んだ。

——そうそう、そいつ。なんだ、中澤はあんまり存在感のないやつだったけど、流石に石立でも覚えてたか。

これはな、俺との中澤ってやつが体験した話なんだ。

みんな、ゲシュタルト崩壊って言葉知ってるか。一部では超有名なよな、ゲシュタルト崩壊。

知らないやつのために説明しといてやる。

ゲシュタルト崩壊ってのは心理学の概念らしくてな、例えばほら、ひとつの漢字をじっと眺めていると「あれ、この漢字、こんな字だったけ？」って思うことないか？

——あるだろ。いや、あるって言うてくれないと先に進まないんだけど。

な、あるよな。はい、あるとして。

それもゲシュタルト崩壊の一つの例なんだ。つまり自分が認識していたもの、自分の常識、自我なんか崩れてしまう現象なんだよ。ゲシュタルト崩壊を意図的に起こす実験もあったそうだけ。

第二次世界大戦中、ナチスが捕虜に対してやった実験なんだけだな。

被験者に一日に数回、鏡に向かって「お前は何者だ」って言わせるだけの簡単な実験だ。その実験を毎日続けるたらな、被験者全員、一ヶ月と経たないうちに気が狂っちゃったって話なんだ。物事を正確に思い出せなくなったり、変なうわごとを言うようになったり。

——嘘みたいだろ？

でもな、俺と中澤はそのゲシユタルト崩壊ってやつに興味を持ってたんだ。

クラスも違うし関わりもなかった中澤とは——どうやって仲良くなったんだっけな。覚えてねえや。

ともかく俺と中澤はそういう都市伝説とか変な実験とかに興味があつてさ、二人でゲシユタルト崩壊の実験をやってみようってことになったんだ。

——おいその女子、佐野。キモいとか言うな。ちゃんと話聞けよ。

で、さっそく中澤が俺の家に遊びに来て、姿見鏡に向かつて「お前は誰だ」っていう実験を中澤に教えてやったんだよ。中澤も最初は面白がって「俺の顔きもいなあ」とかゲラゲラ笑ってた。その後はゲームとかして、夕方になって中澤は帰っていったよ。

それから二週間、俺と中澤は一日に数回鏡に向かつて「お前は誰だ」を続けた。でも効力は全くとっていいほどなかったね。

ま、俺に効力がないのは当たり前かもしれない。俺は三日くらいでその実験に飽きたからな。三日坊主ってやつ。

俺はすっかりゲシユタルト崩壊ってやつに興味が無くなったんだけど、中澤はそれでも不満だったらしい。鏡の実験に加えて、もう一つの実験も提案してきたんだ。

中澤が俺を「中澤」と呼び、俺が中澤を「織部」と呼ぶ、そういう実験。

呼び名逆転実験さ。

俺は鏡の実験は飽きてもうやらなかったけど、中澤はこの呼び名逆転と鏡の実験を同時にやったんだ。

これ、もちろん俺たち二人だけでつるむときだけの実験だからな。クラスメイトや知り合いの前でこんな風に呼び合ってたら変な目で見られるだろ。

で、なんだかんだでゲシユタルト崩壊実験を始めて一ヶ月くらいだったかな。

すげえだろ。こんな下らない実験を一ヶ月も。俺も呼び名逆転実験だけはなんとなく続けたよ。中澤があまりにも真面目に続けるもんだからさ。

俺には全然効力がなかったんだよ。多分真剣にやってなかったからかな。

——でもさ、一ヶ月を過ぎた頃から、中澤に変化があつたんだ。

ある日のことだよ。俺が登校して教室に入ったらさ、クラスの友達と言ってきた。

「おい、お前の席、何でか隣のクラスの奴が座ってるぞ。織部に何か用事でもあるんじゃないか？」

ってさ。一体誰だろうってふと自分の席を見たんだ。

中澤が座ってたんだよ。

この前貸したゲーム返しに来たのかって、俺は中澤に話しかけたんだ。

そしたら中澤は「ゲームなんて借りてないよ」って素知らぬ顔で言うもんだから、あれ、あのゲーム中澤に貸したんじゃないかって、って俺は思ったんだ。

で、中澤がひたすら変な目で俺を見てくるんだよ。

なんだよ、って俺が言ったら中澤、意味の分からないことを言うんだ。

「早く自分の教室に帰れよ中澤。そろそろHRが始まるよ」

——これ、俺の台詞じゃないぜ。中澤が言ってたんだ。

俺、中澤が他のクラスメイトの前で呼び名逆転実験をし出したと思つて、ちよつと焦つたんだ。

でも、ちよつと待てよと。

呼び名逆転実験はしてたけど、教室逆転実験はしてないぞ？ いや、というか教室逆転なんて出来るわけもない実験なんだけどさ。そんなことしたら中学の鬼教師に「ふざけてんのか」ってぶん殴られることうけあいだ。

んで、俺は「なあ中澤、お前の教室は隣だぞ」って周りに聞こえないように教えてやったんだよ。

中澤はまた首を傾げて俺を見て、やがてはにかみ笑いをした。「あはは、ごめんごめん」って言いながら、そのときは自分の教室に帰って行ったよ。

それからだよ、中澤がおかしくなり始めたのは。

他のやつが居るときだって構わずに、中澤のやつ、俺のことを「中澤」って呼んでくるようになったんだよ。俺たちさ、そんなホモ疑惑の噂が流されたんだぜ？ ひどい話だよ。っていうか、なんで呼び名逆転したらホモなんだよって。

始めはそれだけだからまだよかった。

実験を始めて二ヶ月くらいかな。俺はもう変な噂流されるの嫌だったから、中澤のこと普通に「中澤」って呼んでただけど、中澤はさ、俺が中澤のこと「中澤」って呼ぶと、すげえ不安そうな顔をするんだ。で、俺のこと変なやつだって言うてきたりもした。

またある日のこと。俺が部活終わって家に帰ったら、お袋が困ったような顔で言うてきたんだ。

「中澤くんが遊びに来ているんだけど、もう夜なのに中々帰ってくれないの。清隆からも何とか言うてあげてよ」

俺はそんなとき、背中に嫌な汗をかいたね。慌てて自分の部屋に入ってたよ。

中澤さ、俺の寝間着着てて、俺のベッドでぐーすかぐーすか眠っていやがったんだ。

俺は中澤をたたき起こしたよ。中澤は眠気眼でさ、俺のこと迷惑そうな風に見てきた。

「何だよ、さつさと自分の家に帰れよ中澤」

って、中澤はとんでもないことを言っただ。俺はそのとき、ようやく中澤が本気でおかしくなったことに気付いたね。もっと早く気付いてやればよかったんだけど、今思えばあの時点で手遅れだった

たんだろ。

俺は焦りに焦って、中澤を正気に戻してやらなきゃって、そう思
って中澤に「中澤はお前だ」って教えてやったんだ。

中澤は寝起きが悪いやつでな。しかもあのときのあいつにとって
俺の言ってることは意味が分からないことだったんだろ。ベッド
から起き上がって俺の腕を押して「帰れよ、寝させてくれよ」って
不機嫌そうに言うてくるばかりだった。

俺はどうすりゃいいのか悩んだ挙げ句、部屋にある姿見鏡の前に
中澤を立たせて、「こいつは誰だ？」って中澤に尋ねた。

中澤が突然、そわそわし出した。

俺は必死に「この鏡に映ってるのは中澤昭彦だ」って教えてやつ
た。何度も何度も。

中澤さ、１０分も経たないうちに壊れたよ。

鏡に向かつて「俺は織部だ！」って叫んだかと思うと、いきなり
鏡を叩き壊したんだ。

んで部屋中の物を壊しながら暴れ回った。

当然、お袋も何の騒ぎだって俺の部屋に入ってきてさ、悲鳴も上
げてた。

それで——何だったかな。

その後はもう、色んなことがあり過ぎてあんまり覚えてねえや。

なあ石立。お前、中澤がどうして半年も入院してたか、本当の理
由知らなかっただろ。担任は骨折で入院だって言ってたけど、本当
はこういうことだったんだぜ。高校生になった今だから話せること
なだけだな。

あ、だからって無闇にこの話を振れて回るなよ。噂好きの俺が言
うのもなだけだよ。

いやあ、あんときは俺たちがあんな実験やってたってことがバレ
てさ。精神科に入った中澤が全部喋っちまいやがったんだよ。

こっぴどく叱られたよ。親、教師、精神科の先生。あれはもう一

生分叱られたと言っても過言ではないね。何度泣きながら謝ったとか。

トラウマっていうのは中澤のことだけど、この叱られたってこともトラウマの一つだな。

——え、これで終わりかって？

そんなわけないだろ。これで終わりだったらただの精神が崩壊しちゃったやつの話じゃないか。まあ怖いっちゃ怖いのもかもしれないけど。

本当に背筋が凍ったのはその後さ。

中澤が入院して学校に来なくなつて、しばらくしたときのことでよ。

夜、部屋で漫画読みながら寝転んでただけど、異常なことが起こったんだ。

突然首の辺りがぐつと締め付けられるような感じがしてさ。思わず漫画放り投げて、首を抑えて呻いたよ。

首をこう、輪っかみたいなので締められる感じ。息が出来なくて頭の中が真っ白になつて、涎を垂らしながらベロを思いつきりべーつてして俺は苦しんだ。

どれぐらい経ったかな。気付いたら、首を締め付けられるような感じはなくなっていた。

手鏡で見るとさ、首に縄で絞められたような跡が残ってたんだ。

俺、そんなときもう訳分かんなくてさ、その後ベッドに入ってガタガタ震えるしかなかったよ。

それで日にちが経って、中澤は半年間の入院生活を終えて学校に来たんだ。

中澤さ、もう普通のちよつと影の薄いやつに戻ったよ。でもさ、一つだけ入院前とちよつとだけ変わったところがあるんだ。

——何だと思う？

信じられない話さ。

退院後の中澤、何となくだけど、俺に顔つきが似てるんだよ。気付いたやつは気付いたね。

ある奴が並んだ俺たちを見て「お前らってちよつと顔似てるよな」って言うてきた。今まで一度もそんなこと言われたことないのにだぜ？ つーか、元々中澤とは似ても似つかない顔だったのに。

それだけじゃないんだ。

ある日、マツクで中澤と二人っきりで話す機会があつてさ。中澤がふと気まずそうな苦笑いを浮かべて、含んだような言い出した。「こんなこと言うていいのか分かんないけど、織部だけには言っておこうと思うんだ」

何か嫌な予感がしたけど、俺は黙って中澤の話を促した。中澤、それから何て言っただと思う？ 中澤、深刻そうな顔でこう話したんだ。

「俺、入院中に自分がなんなのか本気で分かんなくてさ、すごく混乱して、正直言うど死にたくもなったりした。それで、その、寝てるときに変な夢見てさ」

俺は言葉を失った。ゾワゾワって、背筋から毛虫が這い上がってくるような嫌な感覚が全身を襲ったんだ。

「首つり自殺——しようとしたんだ。本当に苦しかった。看護師さんに見つかって止めてくれたからよかったものの。いや、夢の話なんだけどね。すぐくりアルだったもんだからさ」

——俺、もうちよつとで死ぬところだったんだよ。

しかも中澤の思い込みだよ。ほら、生き霊ってあるだろ。生きている人間の思念とか怨念が霊となって現れるってやつ。

怨念とは違うけどそういうもんなのかなって今は思う。

あの中澤の中澤にとって中澤とは自分ではなく、この俺、織部清隆が自分だと認識していた。これってさ、『自己を認識している』ということにはならないよな？

『他人を自分と認識する』なんて、世の中にあり得ていいのか？
人間の間違った認識で人を殺せるなんて、あり得ていいのか？
ふと、たまに考えるんだ。俺があのまま中澤を放っておいたら、
中澤は俺っていう存在を乗っ取っていたのかなって。非現実的な話
なんだけどさ。もしかしたら俺は中澤の思い込みの末に殺されて、
中澤はどんどん俺とそっくりになって、それで、最後には俺の位置
に中澤がいたのかもしれないって。
そんなことがあるとしたらと思うとね、今でもゾツとするんだよ。
——ま、そんなのあり得ない話なんだけどさ。

はい、これで俺の怪談は終わり。
しょっぱなから怖すぎたかな？ 流石俺だね。

そう、俺だ俺。——俺？

——俺って、誰だっけ？

ぶふっ、んなビビるなよ女子。ジョークだったの。

——不謹慎？ 馬鹿言え、これは中澤と俺の問題だぜ。当事者が
どう言おうと不謹慎になんかなるもんか。それに中澤とは今だにつ
るんでるしな。もう親友と言える仲だぜ？ 俺でも信じられないけ
どな。

さてと。猫面、俺は次の語り手を指名すればいいんだっけ？

あ、そうか。ロウソクの火を吹き消してからか。了解。

——よし、消した。じゃあ次の語り手を指名するぞ。

そうだな。うーん。

次は——赤羽^{あかばね}、お前頼む。学級委員長としてとびつきり怖いの頼
むぜ。

え？ 今更なんだよ。お前もちゃんと参加するの。全くこれだか
ら真面目ちゃんは。今ぐらい空気読もうぜ？

な、赤羽。

【貳】記憶の中に——語り手、赤羽吉乃

——やっぱり私も話さなきゃ駄目なの、織部くん。

はあ、分かりました、話します。

私、織部くんみたいにあんまり長い話は用意してきてないよ。本当は私、拾参怪談なんて興味ないし。今日の本来の目的は皆がハメを外しすぎないよう見守ることだったんだから。

——いや、真面目ぶるといつか、委員長ぶりたいのよ私。

高校生になつて初めて学級委員長になれたんだから、ちよつとくらいそれらしくさせてよね。

あ、そうだ自己紹介するんだっけ。

えと、赤羽吉乃です。あかはねよしうーん、あとは特にありません。怪談話始めます。

——ああもう、皆静かにしてよ。えつ、自己紹介が足りない？

そ、そんなこと言われてもなあ。趣味なんか読書くらいだし——あつ、将棋が得意です。

——ふうん、島田くんも得意なんだ。じゃあ今度一局しようよ。

えつ、学校では駄目だよ。学校に必要な無い物は持ち込み禁止なんだから。

じゃあどこでつて……ううん。

そうだ、次の土曜日にお母さんにお菓子作り教えてもらうんだけど、島田くんも来る？ そのついでに一勝負どうかな。お菓子食べながらしようよ。私たち、家も近かったでしょ。

——ちよ、ちよつと皆、どうして騒ぐの。そんなんじゃないってば。他に来たい人がいるなら来ていいよ？ 私の家結構広いし。

お邪魔つて、どういう意味なのそれ。そんなんじゃないのに。

——もう怪談始めるよ？

はい、皆静かにしてね。

これはね、私が小学校低学年のときの話なんだけど――。

そうそう、小さい頃ってさ、よく不思議な体験したよね。子供はみんな大なり小なり靈感を持っていると思うの。私も昔そういうエピソードが結構あるし。

人形が話しかけてきたりとか、友達と遊んでいるといつの間にか知らない子が混ざっていたりとか。

一番衝撃を受けたっていうか――子供心に響いたのは、やっぱりあれかな。

私ね、実はお兄ちゃんがいたの。

みんな私のこと一人っ子だと思ってたでしょ。実はいたんだよ。

――そんなに気まずそうにしないでよ。昔に事故とか病気で亡くなったとか、そういうのとはちょっと違うから。

あ、始めに断っておくけど、これあんまり怖い話ではないかもね。

私、小さい頃はお兄ちゃんとよく遊んでね。お兄ちゃんとはすごく仲がよかった記憶がある。

小学校低学年の遊び盛りでね、お兄ちゃんはよく自転車で私を連れ回して遊んでくれた。山に行つて虫捕りしたり、駄菓子屋でアイス一緒に食べたり、フラフラプとかテレビゲームとか、昔流行ったプラスチックのコマで遊んだりとかもしたなあ。

ただね、遊んでもらったのはよく覚えてるんだけど、何か記憶がおかしいんだよね。

――お兄ちゃんの顔、今でもよく思い出せないの。

でもさ、子供の頃の記憶ってかなり曖昧じゃない？ 町の風景とかよく遊んだおもちゃはよく覚えてるのに、人の顔ってあまり思い出せないことあるよね。幼稚園のときの友達の顔とか、いっぱい遊んだはずなのにどうしてか思い出せない。そんなことってよくあるじゃない。

普通はさ、お兄ちゃんの顔を思い出せないのもそういうことなの

かなって思うでしょ。私も最近までそう思ってたんだけど、それは違うってことが最近やっと分かったんだ。

お兄ちゃんはね、私のこと大切な妹だと言ってくれたけど、お父さんとお母さんのことはあんまりよく思ってたみたい。

お父さんやお母さんと極力会話しようとしなかったし、両親と会話している光景すら思い出せなかったくらいなの。ご飯だつて四人で一緒に食べたことはなかった。お兄ちゃんは夕飯の時間になると部屋にこもってテレビばかり観てた。

お兄ちゃんはいつも駄菓子屋で買ったお菓子を食べるだけで、空腹すら訴えてこなかったんだよ。

私も小さかったから「お兄ちゃんは食べなくても平気な人なんだ」程度にしか思ってたかった。

そうそう、家族全員で旅行に行ったことがあったつけ。

お兄ちゃん、色んなところに出掛けるのが好きでね、大喜びしてたよ。お兄ちゃんもあのときは親に甘えてさ、お父さんもお母さんもすごく楽しそうだった。

旅行は——どこに行ってたっけなあ。よく覚えてないや。

覚えてないっていうのはどこに行ってたかってことでね。景色とか、そのときの雰囲気はよく覚えてるの。

綺麗な湖があつて、一面に青い牧場が広がっているようなところ。お父さんの運転する車の窓から眺めると、牛とか馬が遠くに見えたりするの。山の麓にはペンションがあつて、猫をいっぱい飼ってるペンションだった。

ペンションで朝食を食べてると、太った猫が膝の上に乗ってきて、スクランブルエッグを美味しそうに眺めてくるの。しつけされてるのか、つまみ食いはしてこなかったけどね。

——あ、猫面さん、興味津々そうだね。そんなに猫好きなんだ。

山の奥に車で向かつて、綺麗な滝があつてね、ソフトクリームが溶けて手がベタベタになるくらい唾然として眺めてたなあ。お兄ち

やんなんか柵から身を乗り出して滝の下を眺めようとしててね、お母さんに叱られてた。

そうだ、その滝をバックに家族四人で写真を撮ったんだよ。

うちって家族揃って写真が嫌いだね、その旅行でも一枚も写真を撮らないはずだったんだけど、お兄ちゃんがどうしても撮りたいって駄々をこねたの。

お父さんが仕方なく近くお土産屋さんで使い捨てカメラ買ってきてくれて、それで通リかかった登山途中のお爺さんに撮影してもらおう頼んだの。

お母さんがお父さんに寄り添って、その下で私とお兄ちゃんがピースしてるっていう構図。

それで撮ろうとしたんだけど、そのお爺さんがフィルムの巻き方分かんなくて、お父さんが一端カメラの使い方教えるためにお爺さんのところに行ったの。

教えてあげてる最中、お兄ちゃんを見たらすごく不安そうな顔をしてた。顔はよく思い出せないんだけど、そういう表情をしてたっていうのだけはよく覚えてる。

するとね、お兄ちゃんの肩にぽんってお母さんの手が乗ったんだ。お母さんは優しそうな顔で微笑んで、お兄ちゃんもくしゃくしゃな笑顔でお母さんを見上げてた。

なんでそんなに二人が笑いあってるのか、あのときの私にはよく分からなかったんだけど。

やっとお爺さんがカメラの使い方が分かったらしくて、ようやく仕切り直し。

さっきと同じポーズだったけど、一つだけ違うのはお母さんの右手がお兄ちゃんの肩に乗ってたこと。

あの旅行で撮った、たった一枚の写真がそれだった。

あの旅行からなんだけど、それで降さっぱりお兄ちゃんとかしたって記憶がないの。それどころか、お兄ちゃんの姿すら見なくな

っていた。

両親はお兄ちゃんがなくなったにも関わらず普段通りの生活を送っていたものだから、私も子供心に何か触れてはいけないことだと思っただけで聞くことはしなかった。

一度だけ勇気を出してお母さんに「お兄ちゃんどこ行っただの？」

どこか遠くで暮らしてるの？」って尋ねたことがあったんだけど、お母さんは何か驚いたような顔をするだけで何も答えてくれなかった。

私のお兄ちゃんに対する記憶も歳を追うごとに段々薄くなっていた。

それから小学校中学年になって、高学年になって、そして中学にあがったときのこと。

ある休日のこと、ふと昔のアルバムを開いて眺めていた。

写真嫌いな家族だからすぐスラスカなアルバムだったんだけど、一つだけひどく目を惹かれる写真を見つけたの。

——そう、あの旅行の写真。

滝をバックに写した、お父さんとお母さんと私の三人の写真。そこにお兄ちゃんの姿はなかった。

私ね、そこでようやく、「そういえば私にはお兄ちゃんがいたんだっけ」って思い出したんだ。変な話でしょ。それだけ私にとってお兄ちゃん存在は曖昧になっていたの。

でもね、その写真をよく見ていたら、あることに気付いたの。

お母さんの右手が不自然に浮いてるの。お母さんの下に何かがあるみたいだった。小さい私も、私の隣に誰かがいるみたいに写真端へ寄っていたし。

お母さんのその右手がね、何もない空中なのに、簡単に割れてしまいそうな卵を掴むように柔らかく包んでいるみたいだった。

それを見た中学生の私は、何か重要なことをお母さんに聞き忘れてるって、そう直感した。

写真をアルバムから引き抜いてお母さんのいるリビングへ向かって、お母さんにその写真を見せたんだ。

お母さんはいつかした驚嘆するような顔でその写真を手にとってそれから涙を一つ、写真の上に零した。

それから、お兄ちゃんのことをつらつらと話し出したの。

お母さんがお兄ちゃんを身ごもったとき、お母さんは病気にかけつつちゃって、万全な状態で出産を迎えられなかったって。

——お兄ちゃんは、生まれてすぐに亡くなってしまったって。

そう話してくれた。

名前は浩二か正広か、ちゃんと決まっすらいなかったんだって。そういえば私はお兄ちゃんのことをお兄ちゃんとか呼んでなかったから、本当はお兄ちゃんの名前だってよく分かってなかったのかもしれない。

お兄ちゃんがいたあの暮らしの一体どこまでが私の幻覚だったのかも分からない。

でもお兄ちゃんは今、本当はお父さんとお母さんのこと嫌いだったのかもしれないって思うんだ。だから両親とはあまり関わりたくなかったんだよ。

妹の私は普通に生きて暮らせるのに、どうして自分だけって。

お兄ちゃんがいなくなったのは、多分お兄ちゃんがお母さんたちを許したからだと思う。お母さんとお兄ちゃんが笑いあったあの瞬間、お兄ちゃん、本当に幸せそうな顔してたから。

私はその日から、お兄ちゃんのことを思い出すよう必死に記憶を探った。でもね、こうして年が過ぎるごとにお兄ちゃんとの思い出は一つ一つ無くなっていくの。

多分大人になったらお兄ちゃんとの思い出なんて何一つ残ってないのかもしれない。

それでもね、あの写真だけはなくさないようにしてるんだ。

あの写真さえあれば、あの旅行のときの思い出だけは鮮明に思い出せるから。あれがなくなったときが、お兄ちゃんと私たちの最後だから。

——私ね、人が本当に死ぬときって、人から忘れられちゃったときだと思っただ。

誰かの記憶にある限り、人はその人の記憶の中で生き続けていられるから。誰からも忘れられたときが、本当の死だから。

だから私だけは絶対にお兄ちゃんのことを忘れない。

万が一私が忘れそうになったらさ、みんながこの話を思い出して私に教えてあげてね。

——あつかましいお願いかもしれないけれど、よろしくね。

はい、私の怪談らしくない怪談終わり。

ごめんね、怖くないどころかしんみりさせちゃって。

——津田ちゃん、どうして泣いてるの？ 涙もろいなあ。

それにみんな、さっきまでとは打って変わって静かになっちゃったね。あんまりハメを外さないのもどうかなって思えてきたじゃない。

——もうロウソクの火、消すね？

はい、じゃあ次の人を指名します。いいかな、猫面さん。

——はい。じゃあ、古ヶ崎くん。

どうしたの古ヶ崎くん、びっくりした顔して。そんなに緊張しなくていいよ。それに顔色悪いけど、大丈夫？

——そう、大丈夫ね。

じゃあ頑張ってね、古ヶ崎くん。

【参】片目の女の子 ― 語り手、古ヶ崎和馬

― えっと、あの。

古ヶ崎和馬です。僕はこういうの苦手だから上手く話せるか分からないけど、よろしく。

― ほ、本当に大丈夫だってば赤羽さん。吐き気はないよ。

ただこういう場所に来るとき、あんまりいい気分はしないんだよ。こっ胸のあたりがざわざわするというか――ともかくちょっと居心地が悪いんだ。首筋を撫でられるような嫌な感じがしてさ。

……。

― ねえ、怪談を始める前に一ついいかな。

その、えと、なんていうのかな。本当に変な質問なんだけど、ね。あのさ。

今日来るはずだった十三人目ってさ、もしかしてもう来てるのかな。

いや、ほらあれ。

もしかして、隅っこにいるあの子がそうなの……？

― ち、違うよ、別にみんなを驚かそうってわけじゃ。

ご、ごめん変なこと言つて。……忘れてよ。

― えっ、あ、うん。分かったよ猫面さん。気にしなきゃいいのね。

じゃあそろそろ始めるね、怪談。

何から話せばいいんだろ。

例えばさ、みんなが普通に街を歩いているとして、百人の人間とすれ違ふとするじゃない。

その百人のうちの、何割が普通の人間だと思う？

― あ、ごめん。脈絡がなさ過ぎて意味わかんないよね。

その、僕はね、昔から魂のない人間――つまり幽霊のようなもの

を日常生活でよく見てしまっただよ。

これは僕が特別に靈感が強いからとかそういうことじゃないと思うんだけど。それに、自分の靈感が特別だなんて思ったことないし。僕はね、靈感に強い弱いなんてないと思うんだよ。

多分ね、みんなも日常で僕と同じように人に擬態した霊を見ていると思うよ。

それに気付いた人、人が霊を見分られる人、そして霊とうまく交信できる人が始めて霊能力者と名乗れるんだって、僕は思う。

さっきのさ、街で百人の人間とすれ違ふと何人が……って話なんだけど。

僕ね、ある日を境に見分けられるようになったんだよ。百人のうちの何人が人間で、何人が霊なのか。

みんな、ウィジャボードって知ってる？

えとね、外国のこっくりさんみたいなやつだよ。降霊術に使う道具みたいなの。

四角い木のボードにアルファベットが描かれてて、左下にハロー、右下にグッバイ、それで上にイエスとノーが書かれてる。盤上でハート型のプレートが動いてそれらの文字を指し示してくれるんだよ。霊が僕ら人間にメッセージを送ってくれるんだって。

家の屋根裏を掃除してたらね、見つけたんだ。それがどういうものなのか、その時は分からなかったけれど。

どうして屋根裏にこんなものがあるのか、家族に尋ねてみたけど誰も知らないんだ。

——あ、ちなみにこれ僕が中一のときの話ね。

それである友達のところに行って行ってそれを見てもらったら、そこでやっとうィジャボードだって分かったんだ。その友達はオカルトが大好きだったらしい。

僕ね、昔っから幽霊が苦手で、それがどういうものか分かって、気味が悪くなっちゃって。

だってさ、家族が誰も知らないのに屋根裏に降霊術の道具があるんだ。すごく気持ち悪いじゃないか。

友達も興味ありげだったから、僕もウィジャボードを譲って帰ろうと思ったんだ。

でもね、友達がどうしても一度だけ試してみたいって言うからさ、僕、断れなくて。二人でやったんだよ、ウィジャボード。

あれは――放課後の屋上だった。

季節は秋で、夕日が照っていたけど、風が少し肌寒かったな。

二人でプレートの上に手を添えて、友達が何かを唱えるんだ。

するとね、プレートがぎこちなく動き始めたんだ。プレートはゆっくりゆっくり動き出して『ハロー』のところで止まった。

その瞬間、物凄い突風が辺りに吹いたんだよ。前髪が目に入って、余った手で慌てて目をこすった。ふと目を開けるとね、僕たちの前に女の子が立っていたんだ。

女の子はフランス人形みたいな白を基調とした衣装を着ていて、巻き髪を胸の辺りまで伸ばしていた。

僕はその女の子の顔を見て、全身に鳥肌が立ったよ。

片方の目がね、ないんだ。

右目がなくて、そこにぽっかりと暗闇が空いていた。それでも瞼は閉じずに見開いたままで、静かに僕らの手元のウィジャボードを見下ろしていたんだ。

僕、怖くなって友達の方を見たんだ。でも友達は全然女の子に気付いてないみたいだった。それで構わず質問を始めていた。

あなたは霊ですか、あなたの性別はなんですか、いくつで亡くなったんですか、って。

全ての質問に僕らの手元のプレートは答えてくれたよ。イエスやノー、またはアルファベットで。

アルファベットで示してくれるときは全部英語だったから中一の僕たちは半分も意味が分からなかった。プレートが盤上で滑るたびに静電気みたいなのが指先に走ってすごく痛かったけど、僕は怖く

て怖くて指を離せなかった。

女の子は口を結んでウィジャボードを見下ろしていて、僕はちらちらとその女の子を見た。女の子ね、たまに口元をほころばせたり曲げたりしていた。

友達是一向に女の子に気付かないし、ただ楽しげにウィジャボードを見つめるだけで、それからその友達、こういうことを言い出したんだよ。

「古ヶ崎くん知ってる？ ウィジャボードのプレートが動く理由」

僕は何も言えず、ただ首を横に振った。

「こうしてプレートが動くのはね、ちゃんと科学的根拠があるそうなの。人間は身体の一部に意識を集中させるだけで、自分の意志とは関係なくその部位の筋肉が動いてしまうのよ。今私たちは、プレートが霊のパワーによって勝手に動いてると錯覚しているだけなの」僕はそうは思えなかった。だって——だって僕らの目の前には明らかに異形の何かがいるんだから。

僕はそのことを友達に教えようと思ったんだけど、おかしいんだ。

——何がって、その。

声が出ないんだよ。きゅっと喉を締め付けられてるみたいに、声を出そうとしても空気だけがぼつと抜けるだけなんだ。

どうということなんだろうって前を見たら、ようやく分かった。右目のない女の子がじろつと僕を睨んでいたんだ。

女の子が目で伝えてきた。『余計なことを言うな』って。

そしたら友達がね、恐ろしいことを言い出したんだ。

「ねえ古ヶ崎くん、このままプレートに手を置いたままじゃ何の意味もないわ。本当に霊がここに降りてきているならプレートに手を置いていなくてもひとりで動いてくれるんじゃないかしら」って。友達はそう言っ、あっさりと置いていた手を離れたんだ。

僕もそれにうろたえて、思わず手を離しかけたよ。

それから友達が急かすんだ。古ヶ崎くんも手を離せ、手を離せつて。

僕はかたくなに首を振って拒絶をあらわした。何度もそのやりくりを続けていたら、友達も諦めて呆れたように顔を逸らしたんだ。そしたら、不意にプレートが滑り出したんだ。ゆっくり、ゆっくりと。

友達も食い入るようにウイジャボードと僕を交互に見てた。僕は、自分が動かしてるんじゃないんだって身振り手振りで友達に伝えた。『IT DIES』って、ウイジャボードはそう示したよ。

嫌な予感がして、僕は片目の女の子を見上げた。

女の子はね、口の端をこれでもかと吊り上げて笑ってたんだ。それも友達の方を見下ろして。

プレートは最後にゆっくりと『グッバイ』の方へ動いていった。

次の日、あの友達が死んだんだ。

友達は登校中に、上から「危ない！」って声が聞こえて、空を見上げたそうだよ。

工事現場の下を歩いていたときのことらしいんだ。

ちょうど眼球と同じくらいの大きさのボルトが友達の顔に落下してきて、右目を突き破ったんだって。かなりの高さから落下して、ちょうど右目のところだったみたいで。

ボルトは脳まで達して——即死だったらしい。

——その通りだよ信条さん。あのウイジャボードの降霊をやってからというもの、僕は人と霊とを見分けられるようになってしまったんだ。

百人すれ違ったとすると、そのうちの5人くらいは人間じゃないんだよ。

——どうして見分けられるのかって、それは……。

はっきりと言葉で伝えるのは難しいよ。こつ、下手な言葉を使えばオーラとか雰囲気みたいな感じのもの。

空気だね、なんとなく分かっちゃうんだよ。魂があるかどうか

て。

ちゃんと地面に立っているはずに、どこか足が地についていないような。いくら明るい笑顔を浮かべて歩いていても全く生氣を感じられないような。そんな人を街でよく見かけてしまうんだよ。

それでね、これはみんなを驚かすために言うんじゃないんだけれど。

例のフランス人形みたいな片目の女の子ね、今も僕の傍にいるんだ。

——ち、違う。みんなに危害はないよ、多分。

こ、こんなこと言いたくなかったんだけど、もう誰かに言わないと耐えられなくて。

あの女の子ね、友達が死んでからずっと僕についてくるんだ。

常に姿が見えるわけじゃないんだけど、ふと柱の影に目をやるとぼうつと立っていたり、部屋の隅にいつの間にかぼつんと座っていたり。

じいつと僕を見つめてくるんだ。感情のない目で。あのときみたいににやりと笑ったりせず、ただただ静かに見つめてくる。

僕は多分、監視されてるんだよ。僕がウィジャボードでいたずらに降霊なんかしたから、また何かおかしいことをしないかって。

今もその女の子、僕のこと睨んでいるんだ。目がどこかすわっている。僕、本当はこんな話しなければよかったんじゃないかって、今さら後悔しているよ。

——え、そうなの？ 本当に大丈夫なの猫面さん。あの子、警戒しているだけなんだね。

……ねえみんな、いたずら半分に降霊なんかした僕がこんなことを言うのも何なんだけど。

みんなは下手に霊を冒瀆するようなこと、これからはしないで欲しいんだ。こうして怪談で霊を怖がるのはまだいいけど、決して軽

蔑したり疎んじたり、そういうことはしない方がいいと思う。

ほ、本当はこの拾参怪談だって危険な行為な気がするんだ。だからその、できるだけ気をつけてね。

——十三人目？

違うよ、僕がさっき言った十三人目はあの女の子のことじゃない。それとは別だよ。

えと、その十三人目の子については僕の勘違いかもしれない。ご、ごめんね。

……僕の怪談はここまで。もう火、消すね。

——それじゃあ、次の人を指名するよ。

次は、えっと——。

佐野さん、いいかな？

あ、そ、そんなに睨まないで。ごめん。指名、変えた方がいい？

——うん……確かに、下手に指名は変えない方が無難だよな。

よろしくね、佐野さん。

【肆】思念の末——語り手、佐野葵

——おかしいよ。みんなどうしてこんな所に居て平気でいられるわけ？

アタシはもうさつきから寒気が止まんないわよ。ほんと今日は来るんじゃないかった。

——はあ？ 泣いてないし。

ていうか何？ もしアタシが泣いてるとしたら何か問題があるわけ？ なにがそんなにかおしいのよ。笑うなつ。おかしいのはアンタたちなんだからね。

もう、からかわないでつて言ってるでしょ！

——はあ、はいはいごめんなさい。大きな声出してごめんなさい。い。

でも序盤のうちに当てられたのはある意味ラッキーかも。さつさと怪談話してあとは耳塞いでいればいいんだよね。サンキュね、古ケ崎。

——語り手の話には必ず全員が耳を傾ける？

ああ、そんなルールもあつたね。しかしアンタは物覚えいいわね
織部。

まずは自己紹介だったっけ。

さのあおい

佐野葵です。好きなものはバスケットDSとEXILEです。じゃあこの前EXILEの追っかけツアー行ったときの話をしまーす。

——ごめんごめん、ちょっとふざけただけでしょ。そんな怒んないでよ、矢切。

えーつと。

これは怪談なのか微妙なところだし信じられないかもしれないけど、アタシにはこれしかないから話すね。

病は気からって言葉があるでしょ？

今年の冬はなんとなく風邪ひきそうだな、って思い込んだらホントに風邪ひいちゃったってやつ。

あれさ、ほとんど迷信とか言い習わしみたいな扱いされてる言葉じゃない。でもアタシは違うと思うのよね。

例えば沸騰したヤカンを人に見せて、そのあとその人に目隠ししたとするじゃん。それでその人の手に冷たい水道水をかけたら、その人はそれを熱湯だと勘違いして一瞬熱がるの。

微妙に違うかもしれないけど、それも『病は氣から』の一つなのよ。

知ってる？ 想像力が常人離れしてる人って、本当にその悪戯で手を火傷しちゃうんだよ。人が想像で思い描くことはリアルでも実現するってアタシは思うな。

ダイエットするときだってさ、ひたすら自分に『痩せられる』って言い聞かせると効果があがるわよ。これは何かのテレビ番組でも言ってた気がする。

今から話す怪談はね、幽霊でもなんでもないけど、人間の思い込みの怖さの話なの。

私が初めて思い込みの力に気付き始めたのは——そう、小学校5年生のとき。

アタシ、小学校のときからバスケやってたんだけど、5年生のとき練習中に転んで怪我しちゃってさ。右の膝を骨折しちゃったの。んでそのときさ、バスケットにすごく嫌いやつがいてね、Nっていう女子なんだけど。

——あ、名前はちょっと伏せさせてもらっわよ。

アタシがその練習で転んですぐ痛がってたら、そいつ何て言っただと思う？

「練習がきついからってサボろうとしてるんでしょ」
って言ったのよ。ありえなくない？

確かにそのときの練習メニューは鬼のようにきつかったけど、ア

タシはバスケット好きだから苦にもならなかったし、全然そんなつもりもなかったのよ。

アタシ、それから骨折が完全に治るまで部活動禁止になったんだけど、Nって子がひたすら嫌みを言うてくるわけよ。

サボりとか、仮病とか、そんなことばかり。

アタシも嫌で骨折なんかしたわけじゃないっつーのって思いながら無視してた。そんなに部活きついならアタシと膝交換してよって感じだった。

その頃は大会も近くてね、アタシはもちろんレギュラーから外されたんだけど、その穴埋めで、今まで補欠だったあのNがレギュラー参入したの。

Nはね、練習メニューの辛さをぶーぶー言ってた割には、大会で殊の外活躍したのよ。

本人も予想外だったんでしょね。調子にのって、それから活き活きと部活に取り組みだしのよ。

声出しもよくするようになってたし、動きも前より断然うまくなっていた。

あの大会以降、Nは試合で活躍しまくって完全にレギュラー固定されたわね。あたしが復帰してもレギュラーに入れてもらえるか不安だったくらいよ。

——そうね、そりゃ悔しかったわよ。

だんだんアタシへの嫌みはなくなっていたけど、逆にアタシは焦ったわ。

だってNは今までアタシのことを嫉妬していたと思うのよ、多分だからアタシに意地悪なことばかり言ってきたの。

それがアタシに何も言わなくなってきたってことは、つまりそういうことよ。

Nにとって、もはやアタシなんて眼中になかったってこと。

アタシが復帰しても、あの子はそのまま自分がレギュラーでいられるって自信があったのよ。それくらい自分を過信していたし、実

際もうそれくらいの実力がついてしまっていたと思う。

アタシさ、それがもう不安で不安で。もし補欠に降格するくらいなら、もう部活なんか戻りたくないって思ったくらいだった。骨折なんかずつと治らなくていいって。

毎日毎日、心のどこかでそんな風に考えてた。

そしたらびっくり。

アタシの骨折ね、全治三週間だったんだけど、一ヶ月経って、二ヶ月経って、それでようやくおかしいことに気付いたのよ。全然治らないの。

アタシはようやく、これは自分に『治るな』って念じているせいだって思ったわ。三ヶ月経っても治らなかったときは流石に確信した。

——もちろんこれで終わりじゃないわよ。

ここからはすごく話しくいんだけど、人にこれを話すのは初めてかもしれない。

信じられないっていうのはこのことなんだけど、信じる信じないはみんなの自由だから。

ある日、あのNって子と口喧嘩になったのよ。何が原因だったかなあ。覚えてないや。アタシとNってもととすごく仲が悪かったから、喧嘩の原因なんか覚えてないくらいなのよ。

言い合いになって、アタシもカツとなって酷いこと言っただけ。

Nも頭にきてあんなことを言っただのも納得するわ。

あの子ね、部活のことでアタシにこう言っただの。

「みんなわたしの方が上手いって言ってるよ。つまりあんたなんてもう用無し。もう部活来なくていいよ」

酷いでしょ。アタシもうそれから何も言えなくなつて。悔しくて泣きたくなつて。Nがいつちゃったあと、頭の中で恐ろしいことをぐるぐる考えてた。

Nなんか消えちゃえ。

Nなんかどこか遠くにいつちやえ。

どこか遠くで、死んじゃえばいいのに。

あの頃のアタシ、すごく恐いこと考えてただけど、でもどうしても止まらなかった。Nがどこか遠くの山の中で遭難して死んじゃう妄想を繰り返し繰り返した。

——そのあとどうなったか、もう何となく分かるかな。

Nね、次の日行方不明になったのよ。学校を出たところまでは目撃者がいたんだけど、家には帰ってないんだって。もちろん警察に搜索願いをかけて、Nの家族も町中を探し回ったわね。

アタシは焦ったわ。アタシがああ恐ろしい想像をしたすぐに行方不明だなんて、自分の恐ろしい想像に原因があると思えなかったの。もしかしたらNは、本当にどこかの山の中で死んじゃってるのかもしれないって。

——どうなったかって？

そんな怯えないでよ、そんな顔されるとこっちまで恐くなっちゃうわ。

Nは死んでなんかいなかったわ。一週間くらいして見つかった。でもね、どうも不可解なのよ。

——なにがって、Nが発見された場所がよ。

Nはね、県を三つも挟んだ遠くの田舎の山奥で見つかったの。

きのこ狩りにきていたお婆さんが見つけたそうよ。Nは大木の下で眠るように倒れていたらしいわ。お婆さんが慌てて助けて、Nの身元を警察が調べて、それでようやく感じてくれたの。

Nはひどく衰弱していて、その田舎の近くの病院でしばらく入院して帰ってきた。

おかしいわよね。その場所には飛行機と電車とバスを乗り継いでしか行けないのに、小学生のNが一人でそんな辺鄙な場所に行けるはずがないじゃない。ましてやお金なんか一銭も持っていなかったようだし。

警察がNにそのことを尋ねても無駄だった。Nは失踪時の一連の出来事を覚えていなかったそうなのよ。

誘拐の可能性もあがって小学校で警告が出ていたけど、真相は不明のまま。Nは外傷も何もなかったから、誘拐だったのかすらも怪しいわね。

アタシ、すごく反省したのよ。人間の思い込みの力には気付いていたけど、まさかその影響が他人にまで及ぶとは思ひもしないじゃない。しかもほぼ私の妄想通りに『どこか遠くにいつちゃえ』が実現してしまった。

アタシはNと仲良くしようと決意した。また恐ろしい思い込みでNを酷い目にあわせるのはもうこりごりだったから。

それからNに対して好意的に接していたら、色々気付かされちゃった。

Nはただちよつと心が弱いだけの子だったのよ。だから不安になってアタシに意地悪してたり、無闇に相手を傷つけることを言って自分を守ろうとしていただけだった。

Nと仲良くなって、お互い謝ったわ。それからNに怪我のことを励ましてもらって、アタシも早く復帰できるように必死に骨折が治るように念じた。

それからもうびっくり。足の枷が外れたように膝もぐんぐんと回復して、すぐにアタシは部活に復帰出来たのよ。

小中と、Nとはバスケでいいライバルだったけど、高校に入ってから離ればなれになっちゃった。

——うん。結局、あの失踪事件の裏は話せずじまい。

どうしてアタシが今までこの話を誰にもしてこなかったんだと思う？

もちろんNに知られなくなかったのもあるわ。だからみんなもさ、出来るだけこのことは誰にも話してほしくないの。みんな、ほんと

頼むよ。

まあなにより、アタシね、恐いのよ。
人間の思い込みはリアルで実現するって、あまりみんなに知られ
たくなかったの。

自分だけならまだしも、他人にまでその思い込みが実現するなん
て。アタシはその現象を信じてるからこそ、それがすごく危険な行
為だと思うの。

この話を信じる信じないはみんなの勝手だよ。
でも——これからは気をつけてよね。

はい、これでアタシの話は終わり。

よく考えればこれ、織部の話にちよつと似てない？ 思い込みが
どうとかって。本当にこういうことってあるのかもしれないわよね
あと、これもアタシの思い込みかもしれないけどさ。

猫面を含めたアタシたち十三人の他に——何かの気配感じない？
さつきから考えないように努力はしてるんだけどさ、どうにも気
持ち悪くて。熱帯夜なのにさつきから寒気が止まらないんだけど。

ねえ猫面、なんとか言つてよ。どうしてさつきから黙ってるの？
な、なによ気持ち悪いわね。無言でこつち見ないでよ。だんだん
不気味に見えてきたわよ、その猫のお面。

——からかったわね。笑わないでよ、このヘンテコお面。
また怖くなつてきちゃった。

ね、ねえみんな？ ちよつとここで休憩しない？

——なんでつて、いやその……。

とにかく休憩しようよ。ねえ猫面、休憩くらいいいでしょ？ い
くらなんでもぶつ通しで十三も怪談話を続けるなんて辛すぎるわ。

ね、猫面？

猫面の語り 其の貳

——さて、じゃあここらで一息入れましょうかね。

ここまで四人四様、興味深い怪談ばかりだったわ。思わずぞくつとしちゃったわよ。

ええ、私だつて怖がることぐらいあるのよ。私も人間なの。

それと、一つ気になったことがあるのだけど。

——ここまでみんな、しめし合わせたように実体験ばかり話すのね。

いえいえ、別に悪いって言うてるわけじゃないわよ。ただね、実際に霊現象と遭遇した話って、本人に対して何かしら意味を持っているものじゃない。霊現象が貴方たちに害を与えるつもりであれそうでなかれ、こういう話は霊を引き寄せるものだからね。気を付けた方がいかに越したことはないわね。

特に貴方、古ヶ崎くん。分かっているとは思うけれど、これからもその片目の女の子とは上手く付き合っていくべきだわね。貴方自身がその子に認められれば自然といつの間にか居なくなってくれると思うわよ。

そうそう、古ヶ崎くんの話を聞いていてもう一つ思い出したわ、拾参怪談の決め事。

——八つめ、決して死者を冒瀆するような発言をしないこと。

よかったわね、ここまでそういった発言はなかったと思うわ。というか、まとも倫理観を持つてる人間ならば死人を馬鹿にしたりはしないわよね。

——決まり事はまだあるか、ですって？

どうかしら。あったような無かったような。

うふふ、そんなに心配しないでいいわよ。拾参怪談の決まり事なんてあってないようなものだよ。

——もっとも、それぞれが最低限の常識や倫理を持っていればの

話なのだけど。

拾参怪談に限ったことではないのだけれど、ルールというのはどんな世界にも存在しているわよね。完全な無法地帯だなんて社会においてあり得ないもの。

さて、そもそもどうしてそのルールなんてものが作られたのか、みんな分かるかしら？

——その通りよ赤羽ちゃん。安穩を脅かす者が必ず居るからだわ。だから社会には決まり事があり、禁止事項が設けられているのよ。この拾参怪談だってね、そういう不埒な者が現れなければ決まり事なんて必要ないと思うのよ。ただみんなが寄り集まって純粹に怪談話に興じればいい。

本当はそれだけでいいのだけど、でもこういう場所だからね。

貴方たちもこの旧拘置所へ肝試しに来たクチでしょう？ 今までここに来た人々の大半もそういう理由でここへ足を運んでくるわ。

もう分かるかしらね。

面白半分でこの場に集まってくるような人間だからこそ、それだけ平穩を乱す可能性があるということよ。だからこの拾参怪談にもこれだけ厳密に決まり事があるのよね。

この決まり事は貴方たちへのせめてものお願いであり、最終警告なのよ。

だから決まりを破ったらどうなるかだなんて、聞くだけ野暮なことだと思わない？

——せいぜい、これからの人生に支障をきたさないように気を付けることね。

ふふ、冗談よ冗談。

あはは、どこまでが冗談なのか計りかねるでしょう。それは貴方たちの判断に委ねるわ。

どうしたのよ貴方たち。みんなして青白い顔しちゃって。

そういえば、あたしたちの他の何者かの気配を感じ取っている人

がちらほらいるわよね。

——やっぱり気になるわよね。

安心して。貴方たちに危害を加えようとか、そういうつもりはないはずだわ。ただあんまりその存在に気をかけない方がいい——とだけは言っておこうかしらね。

うふふ、別にこれは冗談じゃないわよ。

——あら、どうしたの佐野ちゃん。そんなにそわそわして。

何か言いにくいことでもあるのかしら。みんなに聞かれたくないならこつちにおいでなさい。

何を怖がってるのよ、あたしは何もしないわよ。ほら、早くおいで。そつと耳打ちするだけでしょ。

——うふふ、なあんだ、そういうことね。

ほら、そこにカーテンがあるでしょう。その向こうにあるわ。そこでしてきなさいな。あ、カーテンはちゃんと閉めた方がいいわよ。——大丈夫よ、部屋を出たことにはならないわ。みんなも催したらそこでしなさいね。

お帰りなさい佐野ちゃん。

ね、カーテンを閉めていてよかったでしょう。ここのお手洗いは扉がないからね。

——どうしてなのか気になるかしら。

そのお手洗いは過去の死刑囚が利用していたのよ。そう、死刑執行前にね。

服役者は死刑執行を知った途端、自決してしまう者がいっぱい居るの。服役者に死刑執行を伝えるのだって執行直前なのよ。だから排泄中でも看守の監視がある。

扉がない理由、これで分かるかしら？

——それを早く言え、と言われてもねえ。そこしかないんだから仕方ないじゃないの。それに、ちゃんと綺麗にしてあったでしょう

？ あたしが毎回丁寧に掃除してるんだから。

あ、そうだ佐野ちゃん。カーテンの向こうに机があったでしょう？ あそこで死刑囚は遺書を書いたのよ。

——突然連れていかれて遺書など書けるのか。貴方たち、今そう思ったでしょう。

それが書けるのよ。死刑囚はね、刑務所から拘置所に移されたその日から、なんとなく分かってしまうのよ。

自分はいつか死刑を宣告されてしまうんだ、ってね。

辛いわよね。執行の事前告知もないまま七年も八年も舎房の中で孤独に暮らさなければならぬのだから。とてもじゃないけどまともな精神状態ではいられないわよね。

それでも死刑囚は覚悟を決めなければならない。死刑囚はね、よく寝る前に物思いにふけるらしいわ。今までの人生を振り返り、家族や友人の顔を思い描き、そして遺書の内容を考えるの。

どうして就寝前なのかというとな、死刑を告知されるのは必ず執行日の朝だからよ。

朝、看守が革靴を鳴らす音がコツコツコツ、と。自分の舎房の前でその足音が止まったら、それが自分の最期。

もし足音が遠ざかっていても次の朝かもしれない。死刑囚は毎日毎日24時間ごとに覚悟を新たにしていくの。

知ってる？ 日本の平均寿命は70歳前後だけど、拘置所内の服役者たちの平均寿命は50歳前後なのよ。20年も違いがあるなんて驚きでしょう。

精神状態がどれだけ人体に対して影響を及ぼすのかがよく分かるわね。

——さて、余談はここまでにしておきましょうか。
貴方たちも充分休憩になったでしょう。

じゃあ佐野ちゃん、次の語り手を指名してちょうだい。

——矢切くんね。

用意はいいかしら？ 緊張しているようだけど。

——そう、ならいいけれど。

よろしくね、矢切くん。

【伍】ノイズ ― 語り手、矢切京平

― 矢切京平。よろしく。

オレと同じ中学出身のやつはいないから、オレのことをほとんど知らないヤツばかりだと思う。オレはあんま目立つの好きじゃないし、気付いたときだけ声かけてくれりゃいいから。

趣味は――ギター、かな。

これ、もう紹介されたから言ったどさ…… お前も相当意地が悪いよな。

なあ、猫面。

オレさ、もうギター止めようと思ってんだよね。

― 理由、知りたい？

怪談ついでに話すからそう焦んなよ、牧村。

こういうこと言うとおかしなヤツって思われるからあんま言いたくねえんだけど、オレ、聞こえるんだ。

― 人間の奏でる音、つつか最悪動物でもいいんだけどさ、とにかく生き物が生み出す音だ。オレな、たまあに変な音が聞こえんだよな。こう、ノイズみたいな。

楽器なんかだと当たり前だろ、ノイズなんてさ。そうじゃないんだ。

変なのは声とか、息づかいとか、果ては身体の軋み。至るところでオレは人の奏でるノイズを聞き取ってんだ。

他人の息づかいとか身体の軋みなんか聞こえるなんてことほとんどねえじゃん。でもさ、ノイズが混じるときだけはつきり聞こえんだよ。

― ノイズが出ている人間がどうなるか？

大体分かるだろ。人間の身体からノイズなんて、マジで縁起わるい。

オレ、姉貴がいるんだ。

実はギター始めたのは姉貴の影響でさ、姉貴に教えてもらいながら練習に明け暮れた。

姉貴はバンドで飯食ってたんだ。高校中退してさ、どこぞのインディーズバンドで活動してたよ。

最初は全然知らなかったんだよな、姉貴がどんなバンドでどんな活動してるとかって。オレも聞こうとしたよ。でもその話題を出す、姉貴はすぐに話を逸らそうとすんだ。

そんなときやさ、バンドがあんま売れてねえこと気にしてるのかわって極力触れないようにしてた。まともな——つつか職とすら呼べねえよな、姉貴のしてたことなんざ。

だって姉貴、よくオヤジやお袋と喧嘩してたもん。オレも小さかったから、オレが居る前じゃ露骨に言い合いなんかはしなかったけど、オレが部屋に戻った途端聞こえてくんだよな、言い争い。

つつか、もう言い争いってレベルじゃないときもあったし。つかみあい殴り合い、物の投げ合いみたいなさ。

あれで子供のオレに隠そうと努力してるってんだからお笑いだよな。丸分かりだったつつかの。

ホント荒れてたよ、あの時期のオレの家。

でもなあ、それでも懂れてたんだよなあ。

——誰をつて、姉貴に決まってんじゃない。いやいや、もちろん子供の頃だけの話だ。

カッコイイツつかさ、何者にも頼らないみたいなことだ。今思うと薄っぺらいんだよな、こんな考え方。

今だから言えるけど、姉貴は人間のクズだったね。マジで。

一度、姉貴が出掛けるのを尾行したことがあった。

中二の夏休みのときだったかな。

姉貴は二日酔いで頭掻きながら、大儀そうにギターケース抱えて

静かに家を出てくんだ。その頃のオレは姉貴に憧れてたから、姉貴がどんな活動してんだろって興味があつたんだ。

それで姉貴をこっそり追っかけた。電車を何本か乗り継いで、辺鄙な片田舎みたいな駅に着いて、そこから40分は歩いた。

狭い路地裏に入っていく姉貴をオレはひたすら尾けた。そしたら、とある廃れたビルの地下に入っていく姉貴を見つけたんだ。

オレも慌ててそこに入った。地下に入っていくにつれて――臭気つつうのかな、とにかく色んな匂いが混ざって、とにかく臭かった。廊下には酔っぱらって漬れてるニイチャンなんかがいたし。おかしなツノを生やした帽子被った男と、顔面ピアスだらけの女が酒をあおりあつてた。

壁には音楽に関するきつたねえポスターが貼ってあって、オレはここがライブハウスなんだと確信したよ。しかもそのライブハウス、なんつつか、かなりコアというかマニアックな所だったって印象がある。

オレな、入り口に近づくにつれて、なんか今から殺されにでもいくような錯覚を覚えた。

――なんでだったんだろうな、よく分からん。あのときはただただ怖かった。

でも戻りはしなかった。あのときのオレは、姉貴を知ることが最も優先してたからな。

入場は完全フリーだった。チケットもカネもいらさない。どころか受付すら居なかった。

入った瞬間、もう衝撃受けたね。衝撃ってか、衝撃波みたいな？扉開けた瞬間、ぶわーってきたんだ、音が。

そう、音の衝撃波。

ギターのコード進行を邪魔するようにベースとドラムが重なってきて、それが凄まじい不協和音を生み出していた。オレは思わず耳を塞いだ。観客が無造作に飛び上がったたり奇声上げてたりして、ステージ上で狂人が楽器を弾き狂ってる。目を攻撃するようなライト

がチカチカして、耐えきれず目を背けた。

するとき、会場の片隅にうずくまってる男が見えたんだ。なんだろうって目を凝らすとその男、ビニール袋に自分の口突っ込んで必死にすーはーすーはーしてんだ。

麻薬だよ。

たまに授業で『ダメ、ゼツタイ』って薬物乱用についてやるだろ。その違犯者がまさに目の前にいたんだ。

さらに目を疑ったのは、オレが居た会場後ろの状況だ。

そのビニール袋の男以外にも異常な連中がわんさか転がってた。注射で薬打ってるヤツ。床に寝転がって酒呑みながらきめえ笑い声あげてるヤツ。狂ったようなあえぎ声出してセックスしてるヤツ。顔面血だらけなのにニヤニヤしながら倒れてるヤツ。楽器の弦でひたすら手首こすりつけてリスカしてるヤツ。泣きながら女殴ってるヤツ。

どこを見ても狂人ばっかだった。

ロックと酒と薬とセックスと暴力と自傷と狂人。

オレが体験したこともないような“陰の世界”がそのライブハウスにはあった。

ただその状況に吃驚するだけで、オレは一步もその場から動けなかった。

そしたら、ステージに姉貴が出てきた。顔を伏せ、バンドメンバーらしき二人の男と出てきた。

前奏が始まっても姉貴は顔を伏せたまま、唄い出す瞬間、ぱつと顔を上げた。

姉貴は派手で悪趣味なメイクをしていて、喉が潰れるような声を絞り出すように唄っていた。

そんで——どうしてかな。

オレ、姉貴の演奏にのって、足でリズム刻んでたんだ。

演奏は確かに不快以外の何物でもなかったんだが、そこは自分で

もよく分かん。感覚が麻痺していたんだと思う。

オレはその喧噪の中、必死に音を拾った。リズムに乗りながら、音を聞き漏らすまいと一音一音に耳をすました。

そしたら聞こえてきたんだよ、ノイズが。

アンプから爆発するように放出される音の奥の奥、誰も気付かないような繊細なノイズ。

ギーンっていう、鉄を爪でこする音に似たノイズ。

その音を聞き分けた途端、鼓膜が痛むような感覚を覚えた。耳の奥を刺されるような感じ。

どの楽器からこんな音がするんだよって痛いのを我慢して聞いていたら、驚くことにそれが姉貴のギターからだったんだ。

素人に毛が生えたようなオレでも姉貴のギターセンスは抜群だったし、実際あのステージで姉貴がミスを犯してるようには見えなかった。

そのノイズを聞き分けてからは、もう姉貴の演奏なんて聴けたもんじゃなかった。しかも周りのヤツらはそのノイズに気付いてないようで、相変わらず叫び声やら臭い息やらを吐き続けてるし。

オレは気持ち悪くなってその場に嘔吐した。吐瀉物の一部が前に立つ男の靴にかかったが、男はそれに全く気付かず踊っていた。

すると、ステージ上に一人の女が上がってきたんだ。長い髪を乱雑に纏めてて、歯が所々抜けてるような醜い女。

女は姉貴に抱きつき、何か狂喜したような叫びを上げて腰を振っていた。多分ありや姉貴ファンのレズだったんだと思う。

演奏は中断され、会場全体から女に対してブーイングが起こった。姉貴は嫌そうな顔で女を引き剥がすのに躍起になっていたが、ついにキレたのか黄色い怒声を上げて女を殴りつけた。その瞬間、観客たちが歓声をあげて、姉はついに調子に乗りだしたんだ。

何度も何度も、姉貴はその女をギターで殴り出した。女は殴られながら何故か嬉しそうに笑ってた。絶対変態だったな、あの女。

何回も何十回も殴って、そしたら女はぐったりして動かなくなっ

た。観客は沸き上がり、姉貴はギターを変えて演奏を続けた。

ステージ上にはまだ女が横たわっているのに。しかも顔面血まみれでピクリとも動かないんだ。

流石にヤバいと思ったわオレも。

我に返って、ここは犯罪者の集まりなんだって怖くなって逃げ出して、そして外に出てケータイで110番を押した。

そのときは姉貴が捕まるかもなんて考えはなかった。

オレはあるとき、姉貴を姉貴として思えなかったんだ。姉貴はオレとは別の世界に住む頭のおかしな連中の仲間なんだって。

10分くらいで警察が二人駆けつけて、オレは覚束ない震えた声で事の顛末を必死で説明した。警察もオレの拙い説明を汲み取ってくれたらしく、応援を呼んで大勢でライブハウスに突っ込んでいったんだ。

……。

怖がられようが軽蔑されようが、もうどうでもいいわ。

それからオレの姉貴、殺人犯として捕まったよ。ステージに乱入してきたあの女、死んだらしい。

姉貴さ、警察の捜査の中で他にも犯罪を犯していたことが発覚したんだ。万引き、窃盗、恐喝その他もろもろ。薬もちょっとやってたらしい。

殺人は――あれが初めてだったみたいだな。ライブハウスのヤツら同様、姉貴もやつぱりイカれたヤツだったってこと。

もちろんオレは知らなかったけど、親は勘づいていたと思うよ。

だからあんなに激しく喧嘩してたんだ。

今思うと恐ろしくて仕方ないわ。

姉貴も成人してたから報道で本名まで出されて、姉貴の犯罪もつまびらかにされたよ。

もちろんオレたち家族も、もう同じ場所には住めないわな。殺人犯の育った家だって近所から後ろ指さされるんだぜ？

そんで、この街に越してきたってわけ。

オレは姉貴みたいには絶対なるつもりないけど、ま、オレのこと軽蔑するならしてくれて構わねえよ。

…… あっそ。

—— 織部みたいな言い草だけどさ、つくづくイイ子ちゃんだよな、赤羽は。

あれからなんとなくギター続けてんだけどな、あの事件以来さっぱりなんだわ。全然楽しくねえの。ギターを持ったたびにあのクソ姉貴の顔がちらついて胸くそわりいんだよ。

もう止めようと思ってんだけどな、ホントは。

—— ホントは、ねえ。

オレさ、一瞬だけど、確かにあのライブハウスでのってたんだ。

こんな音楽もあるんだって、興味を惹かれたのは確かだ。

ギターを捨てようと思っても、こうしていつまでも捨てきれない。オレもいつか姉貴みたいにならないかって、不安で仕方ねえよ。

複雑だな。はあ、もうどうすりやいいのか。

—— ノイズ？

そうだな、あのライブハウスの事件以来聞こえるようになったんだ。

よくないことを抱えてる人間から聞こえてくる。

—— この中ですか？ あー、うん。一人だけ聞こえるわ。

オレたちのメンバーの中では一人だけ。なんか可哀想だから言わないでおくか。

なんだよ、知らなきゃ仏だろ？ 無理に誰から聞こえてくるかなんて知る必要ないだろ。

—— あとは、そうだな。“部外者”からもう一人聞こえる。
なあ猫面。

お前、さっきから変な音聞こえまくりなんだけど。ガリガリギシギシってさ。お前何考えてんの？ それとも昔なんかあったか？

——後者、か。

何笑ってんだよ、気色わりいな猫面。お前、何かある事に小馬鹿にするように笑うよな。うぜえから止めろって。

つつかこれ、怪談話になってる？ 幽霊とか出てないし、妙に生々しい話だったけど大丈夫か？

——そうだな、皆も大体こんな感じだったしな。

はあ、もう喋り疲れたわ。

——はい、火は消したし、もう次のヤツ指名する。

んー、じゃあ牧村。

そう、お前だよお前。なんだよその顔。もしかして話用意してきてねえのか？

——じゃあいいじゃねえか。さっさと話してくれ。

頼んだぜ、牧村。

【陸】不吉な夢 —— 語り手、牧村大地

—— 違うよ、矢切くんの話があまりにもショッキングだったというか。

自己紹介？ ああそつか。ぼくは牧村大地。趣味は、映画鑑賞？ 特にこれと言ってないかも。え、うん。古ヶ崎くんと同じ珠川中出身だよ。

今のクラスのぼくらのクラスはすごいよね。活気があるというか个性的というかさ。珠川中とは全然違うし、結構楽しいよ。

これから話すのは実体験と言っているのか—— 実は夢の話なんだ。そう、眠っているときに見る夢。だからぼくが何を話しても、どうせ夢だろ、の一言で一蹴されちゃうかもしれない。あくまで夢の話だからね、皆みたいに実際に体験したことは違うかもしれない。

でもさ、ぼくにとっては重大な、かなり深刻なことだよ。たとえ夢でも、妄想でもね。

ぼくね、体質なのか性分なのか、よく悪い夢を見るんだ。

そうそう、悪夢ってやつ。虎に追いかけられる夢とか、高いところから落下する夢とか、化け物に食べられちゃう夢とか、そういう類のもの。

悪夢をよく見る人は悩みの多い人間なんだってよく言われるよね。実際ぼくも悩みが多くてね。まあ悩みというか、昔から気が弱いんだよ。テストで失敗したら一週間は落ち込み続けるし、部活でレギュラーから外されたらいつまでも引きずって何もかも上手いかなかったり。中学の終わりの頃、ある子に告白して振られたときのことなんかは今だに吹っ切れてないしねえ。

まあそんな感じでさ。何かにつけてぼくはすぐに悩みの種を作ってしまうんだよ。だからなのか、不安で眠れないこともよくあるし、

眠りが浅いときが連日続くことだつてある。そういう夜は大抵夢を見るんだ。不吉な夢、悪い夢、怖い夢。ぼくの場合は大抵こういう夢ばっかでまいっちゃうんだよね。

ねえ織部くん。一度ぼくを『実験』に誘ってくれたことがあるよね。覚えてない？

——夢日記だよ。睡眠中に見た夢をできるだけ場面を思い出しながら正確に書きだしていくあれ。

織部くんに一度相談したんだ。織部くんならこういうの詳しそうだし、もしかしたらぼくがよく見る悪夢はオカルト的なものが関与してるんじゃないかと思つて。

夢日記を書き溜めていけば悪夢の原因が解ける。織部くんはそう言つたよね。夢は本人の性格、状況、普段の生活に何かしらの関係性を持つているんだつて。ぼくもその通りだと思う。悪夢はぼく自身にも影響があるんだつてこと、さつきぼくが言つた通り認めるよ。

——織部くん、夢日記実験の件、あのときは断つて悪かつたね。ぼくも悪気があつて断つたわけじゃないんだよ。

ただ、ぼくは夢の恐ろしさが気にかかつて、どうも文章として書き出すには気が進まなかつたんだよ。『正夢』つて言葉が世の中に定着しているくらいだ、ぼくは下手に夢の世界を脅かそうとは思わないし。

小学校の頃、ぼくの近所には一部の界限じゃ有名なフリーライターが住んでたんだ。主にオカルト雑誌の記事を書く作家さんでね。図書館なんかに行くといつもノートPCを持ち込んで原稿を書いていたな。

じゃあ、ここからはその作家さんの頭文字をとつてMさんと呼ぶよ。

近所の子供たちの間でそのMさんは結構人気でね、それというのもMさんは中々の美人さんで優しくて、文を書く職業だからか、話してくれるお話がすごく面白かつたんだ。図書館の三階には学生が

勉強するために作られた自習スペースみたいなのがあつて、普段MさんはそこでノートPCで作業していたんだけど、たまに一階に降りてきて児童書スペースで子供たちの相手をしていた。

小学校の頃のぼくもよくそのMさんと遊んでもらったんだ。置いてある本をアレンジして面白く朗読してくれたり、何度かMさんが自作したお話を聞かせてくれたこともあつた。Mさんは昔、児童書を書いていた経験もあつたらしく、子供の心を掴むのはお手の物つて感じだった。

ぼくは小学3年くらいの頃からMさんと付き合いがあつて、ぼくの同級生数名とともにMさんと親睦を深めていった。色んな話を聞かせてもらつてるうちに、ぼくたちが5年生にもなる頃には、だんだん普通の可愛い童話じゃ物足りなくなっていた。それでね、あるリクエストをしたんだ。

不思議な話、あるいは怖い話を聞きたい。

Mさんは困つてたみたいだったよ。子供といえども、これから記事にするような不思議な話、怖い話は雑誌より先に話すわけにはいかない。面白そうなオカルト話はできるだけ記事のネタにしたいしね。それでもぼくたちはリクエストした。刺激を求めるお年頃だったんだ。

考えあぐねた結果、Mさんは自身の『夢の話』をし出したんだ。いくらなんでも夢の話の記事にはしないからね。オカルトといえども、記事には信憑性を持たせて書く必要があるらしい。所詮、夢の話にリアリティなんてないし、本物の心霊を追うオカルト雑誌の趣旨にそぐわないんだ。他人の夢の話は、いわば嘘と妄想の塊みたいなものなんだから。記事にする価値なんかない。

そこでMさんは自分の見た怖い夢の話をぼくたちにしてみせた。思いの外ぼくたちにはウケたのさ。

小学校高学年ついてもまだまだ純粹だからね。夢の話だと分かっただけでも怖いものは怖いし、興味深さは拭えないほどのものだったんだ。それでMさんの話術が加わっているものだから、効果は

絶大だった。

Mさんも予想外の反応に浮き足立っていて、それ以上に嬉しかったみたいだった。オカルト系の雑誌を書くものにとって、純粹に怖がってくれる人たちの存在は貴重だからね。Mさんはそれから子供たちに夢の話をするため、ある行動をとった。

夢日記をつけ始めたのさ。正確に、臨場感溢れる話を語るために。不思議とMさんの夢の話にネタ切れはなかった。ぼくたちに話す内容はほぼ怖い話なんだけど、つまり怖い話ってというのは『悪夢』なんだよね。

ということはだよ、Mさんはよく見ていたんだ、悪夢を。それらの悪夢は、Mさんが本当に見ていない、作り話だとは思えなかった。Mさんの語る夢にはぼくらがよく見る意味不明で不気味な雰囲気が漂っていて、とても普通の発想じゃ思いつけないような話ばかりだったから。

Mさんの悪夢話は、後になると内容が似通ってきていた。ある時期から、『誰かが誰かに殺される夢』ばかり見るようになっていたんだ。その内容は様々だったけど、その頃にはぼくらも6年生で、ちょうどいい刺激でしかなかった。でもぼくは内心、少し彼女のことが心配になってきたんだ。

これは噂で聞いた話でね、Mさんはライターとしては成功の一途を辿っていたんだけど、その反面、家庭の方はどうしてか不吉なことばかり起こったらしい。

Mさんのお父さんがバイク事故で亡くなったり、息子さんが病気にかけたりやすくなってしまうたり、旦那さんが事業で失敗してしまったり。それは奇しくも、Mさんが過去に語った夢の内容に共通点があったんだ。

例えばお父さんのバイク事故。これはMさんが悪夢語りを始めた最初の頃、空を飛ぶ夢を見たという話によく似ていた。一人称視点で空を飛んでいた、とMさんは語り始め、始めは見たこともない山道を低空飛行していたけれど、突然飛行の自由が利かなくなつて山

道を逸れ、木々の間をぶつかりながら進んでいった。木々が開けると、そこは崖だったんだ。崖にさしかかったと同時に飛行力は失われ、そのまま落下していったという夢。落下していった先には真っ暗な沼があって、落ちるか落ちないかというところで夢は終わるんだ。

Mさんのお父さんは、それに似た状況をバイクで体験して、亡くなってしまったんだ。バイクの整備不良からなのか突然ブレーキが利かなくなつて、ハンドル操作もままならずそのまま道を外して川にバイクごと突っ込んで溺れてしまったらしい。

息子さんが再三病気にかかったという話も、Mさんがいつかした悪魔にとりつかれて身体が利かなくなつたという話にどこか似てる。旦那さんが事業で失敗したという出来事も、電話で見知らぬ人からクレームを受け続けたという夢に当てはまるのかなと思える。

この一連の出来事は、Mさんの見る夢が正夢になったんじゃないかと思えてきた。Mさんがそのことに気づいているのかは分からなかったけれど。

そこまで考えが至ったとき、ぼくは不安でならなかった。Mさんは夢を現実にしてしまう、もしくは現実を夢として予知してしまう力があるのではないかと思えてならなかった。

Mさんが語る『誰かが誰かに殺される』という夢。これが何を意味しているのかなんて、もう明らかじゃないか。

あるとき、いつものように図書館一階の児童書スペースでMさんはぼくらに夢の話をしてくれた。その内容を話しておくね。

Mさんの悪夢は大抵、一人称視点で始まる。その夢も例外ではなく一人称だった。広さも奥行きも分からない真っ白な部屋からその夢は始まる。

部屋には自分と、あともう一つ。目の前に大きな怪物が居るんだ。赤黒い金属のように堅牢そうな肌に覆われ、全高は二十メートルほどもありそんな巨体だったらしい。前足の爪は鉤のように曲がり、

頭には棘のような角を幾つも生やしていて、顎は人間の骨など簡単にかみ砕しまいそうなくらい太かった。その双眸は今にも襲いかかつて食い殺さんばかりに睨みを据えていたそうだよ。

『誰かが誰かに殺される夢』っていうのは、その夢では『自分が怪物に殺される夢』ということだったみたい。

Mさんは恐怖のあまり腰を抜かし、地面を這いずるようにして逃げた。怪物は地獄の底でうねるマグマのように喉をゴロゴロと鳴らし、逃げるMさんをじっと見つめているんだ。Mさんは不格好ながらも逃げ続けた。でも、逃げてても逃げてても白い部屋に終わりはなかった。やがてMさんは疲れ果て、諦めたように座り込んだんだ。

すると怪物は動き出した。随分逃げたからか、怪物は遠く小さく見えたけど、怪物は恐るべきスピードで一気に距離を削っていったんだ。怪物があと100メートルというところで、Mさんは覚悟を決めて目を瞑った。そしてMさんの全身に想像を絶する衝撃が走る。怪物がMさんに激突したんだ。

有無を言わさぬ破壊がコンマ1秒の世界でMさんを襲った。全身の骨はプレスされたように粉々に砕け、内蔵は風船に針を通した如く破裂し、手足は絹糸のように簡単に千切れさった。思考なんて追いつかない、それは一瞬のことだ。それは怪物にとって、ぼくら人間が蟻を潰すことのようにあっけのないことだったと思う。

実際体験したわけじゃないけど、新幹線にひかれたらこんな風になるんだろうなあ、とMさんは締めくくった。ぼく以外の子は、怪物こわいーってはいでたけど、ぼくだけは素直にそれを受けとることはできなかった。

新幹線、という言葉にぼくは不安を覚えたんだよ。もしかしてMさんは新幹線にひかれて死んでしまうのかもしれない、と思ったんだ。ぼくは心配になってそれを尋ねたんだ。

しかしMさんは新幹線に乗るほど遠出する予定は今のところないという。ひとまずぼくは安心した。だけどぼくは正夢というのを恐れた。Mさんが新幹線、または電車を使う機会があるかどうかを会

う度に尋ね、必要であれば止めようと思った。それでもMさんは電車や新幹線を使う機会などほばなくて、それはぼくの杞憂に終わったんだけど、でもね。

それでも、Mさんは死んじゃったんだ。殺されちゃったんだと思う。

テレビや新聞での報道はなかったと思うよ。

——何故って。

あまりに状況が不可解で、Mさんの遺体はかなり悲惨だったからだよ。ぼくは人づての噂で聞いたんだ、Mさんがどうやって亡くなったのかを。

Mさんは自宅の書斎で亡くなっていたんだよ。それもあり得ない状態で。

ダンプカーやロードローラーにでも潰されたように全身の骨や内蔵は砕け、破裂し、四肢は何か恐るべき力で無理矢理引き千切られていたらしい。Mさんはそんな無惨な身体を床に横たえて亡くなっていたんだ。

そう、まるで怪物かなにかに叩き殺されたみたいに。

第一発見者は家族の誰かだったみたい。帰宅して書斎をあけると、Mさんはもう――。

あり得ないだろ。とても閑散な住宅街での死に方だとは思えない。普通の人間にあんな真似ができるはずないんだよ。Mさんが本当にそんな死に方だったのか、人づての噂だから嘘かもしれないけど……。

これを偶然か何かだと解釈するのもその人次第だと思う。

でも悪夢には、何か不吉な力が潜んでいるとぼくは思うんだ。大抵の夢っていうのははつきり思い出せないものじゃない？ それは多分、人間が本能的に『実際に起こり得る妄想』を忘れようとしてるからだと思う。

だから夢日記みたいに無理に思い出して書き留めたり、それを無

闇に人に語ることはよくないと思うんだよ。

だから織部くん、ぼくは夢日記実験を断ったんだよ。ぼくは、ぼくが見ている悪夢を現実にしたくはない。

——いいよ、ぼくこそごめんね。

これでぼくの話は終わり。

猫面さん、どうか。この出来事について。

——はは、さすが猫面さんだね。

じゃあ終わったし、火を消すよ。

次、誰にしようかな。

ああ、皆顔逸らさないでよ。一番当ててほしくなさそうな人に当てようかな。

——よし、小野寺さん、お願いします。

大丈夫、ささつと話して終わらせちゃいなよ。皆結構長く語ったけどさ。いい？

さあ、どうぞ小野寺さん。

【漆】ミルキー——語り手、小野寺百合

——小野寺百合です。私が七番目の語り手？ あは、縁起のいいところで回ってきた。

ところで猫面ちゃん。訂正しておくけれど私、絵なんか得意じゃないよ。確かに描くのは好きだけど——好きなことと得意なこととは必ずしもイコールではないじゃない。みんな勘違いしちゃうでしょ？

——あ、そろそろ時間も遅くなってきたから、さっそく話すね。

この町に昔から住んでる人なら、もしかしたら知ってる人がいるかもしれないんだけど——七年前のペット行方不明事件。

——織部くん、覚えてるの？ あなたって変なところで記憶力がいいというか、アンダーグラウンドに強いよね。違う違う、馬鹿にしてるわけじゃなくって。あんな事件、覚えてる人がいたなんて素直に感心してるだけ。

知らない人のために説明したげる。七年前、この町で続けざまに一般家庭のワンちゃんや猫ちゃんが神隠しにあったのね。六件だか七件だか、ものの二ヶ月の間に連続して起こったの。その内容はあんまり表沙汰にされなかったけれど、そのうちの三匹だけは見つかったらしいわ。

私、当時八歳のお子さまだったけど、地元のニュースでそれが取り上げられて結構衝撃的だったかなあ。私もちっちゃいワンちゃん飼ってたからね。ミルキーっていうの。柴犬で、毛色がミルキーって感じだったから。

当時ニュースでそれを見て、残りの見つからなかったワンちゃんや猫ちゃんたちはどうなったんだろうって——想像するだけでも怖かった。神隠しなんて言葉、なんだか不気味じゃない？

それにね、もっと不気味な点があったのよ。ペットが消えたところ

ろにはね、例外なく『絵』が描かれていたんだって。テレビではイタズラと表現されてたけれど、ちらりとだけその『絵』が画面に映ったの。

なんだろう——その、絵は絵なんだけど。普通に見れば、なんらかの“模様”。形は、例えば失敗した目玉焼きのようだし、テーブルクロスに無作為にこぼしたコーヒーの染みのようにも見えるかも。色は黄色のと茶色の二色でね。まあ、みんな想像の想像にお任せするよ。

私、小さいころその絵を見て、ただの意味のないイタズラ書きだとは思えなかったのよ。犯人が必ず残していくあの『絵』には、ある意味があったの。

——どうしてそんなことが分かるのかって？

それを話すには、まず私のことから教えておかなければいけないんだけど。話半分でもいいから、聞いてくれる？

“共感覚”って聞いたことない？

ごく一部の人だけに見られる感覚現象なんだけど。二万人に一人くらいの結構珍しい体質なんだよ。

うーん、ちよつと説明し辛いなあ。例えば食べ物の味を『形』として感じたり、なんらかの文字を見て『色』を感じたり。今、このロウソクの火を見て「この火は音階で言えばレだね」なんて普通言わないよね。ところが共感覚を持っている人は日常的に物事をそういう風に受け止めているの。五感のうちの一つで何かを感じ取った場合、他の五感も想起させてしまうんだよ。

どうして女性の声が『黄色い』だなんて表現され始めたのか、不思議に思ったことない？ 高い音を『軽い』、低い音を『重い』なんて表現することに、疑問を覚えたことはない？

そんな風に、物事に特殊な比喻を与えてきたのが共感覚の持ち主の人たちなんだと私は思うな。

私ね、自分がその共感覚者だって気づいたときはあまりピンと来

なかったんだ。小さいころ、「お母さんの料理はとんがりが無くて好き」と言ってはよく不思議な顔をされたけれど、「百合は他とは違う感性を持つてるのね、将来は芸術家になれるかしら？」なんておだてられてたものだから、「自分は普通と違ってちよつと得をしてる」程度にしか思ってたなかった。

私、自分が見えている世界が人と違うなんて、やっぱり当然のことだったと思うんだよ。今になって思うんだけど。だってさ、もともと物事の捉え方なんて人それぞれなものじゃない？ 一つの音楽をとっても「気持ちよくなれる曲だ」と捉える人もいれば「気分が悪くなる曲だ」と捉える人もいるんだよ。たまに美術館なんか行くんだけど、通常の感覚を持っている人の芸術品なんかでもハツとするような奇抜なものはいくつも見てきたし。「この人には世界がどんな風に映ってるんだろう」って考えるだけでわくわくしちゃう。

私が思うにね、人間には誰にも共感覚に近い感覚があると思うの。神経を深く研ぎすませば、みんなにも新しい感覚が見えてくるんだと思う。

話は戻るけど、ペット行方不明事件の犯人、『絵』を残していくって言ったじゃない。共感覚を持っていれば、実は意図せずともその意味を理解することができる。私もね、その絵を見た瞬間に気づいたんだ。

空腹。あの絵は、『お腹が空いてる』って言ったの。もちろんそれ以上の意味は分からなかった。あの時点ではね。私は初め、犯人はお腹が空いているんだと思ったんだ。それが恐くて恐くて。だって私、あの絵を見た途端、「ああワンちゃんや猫ちゃんたち、この絵を描いた悪い人に食べられちゃったんだ」と思ったもん。ペツトを食べるなんて8歳の私には衝撃が強すぎたし、あの絵だけではそうとは思えなかったもの。

今となっては事件も風化して、みんなも忘れちゃったみたいなんだけ。ずーっとあの絵のことがひっかかってね。犯人も未だに

捕まってないようだし、もしかしたらいつか、うちのミルキーも――
――なんて、あの事件を思い出すだけで寒気がしてたの。

それで、これは最近の話。ミルキーがね、いなくなっちゃったんだ。

この高校に入るお祝いに家族で旅行に行ったの。飛行機に乗るからミルキーは連れていけなくって、それでおばあちゃんの家ミルキーを預けたんだけど。おばあちゃん、友達との出掛け先で倒れちゃったんだ。

ううん、おばあちゃんは大丈夫だよ。ただの胃潰瘍だったんだって。それで病院に運ばれて、そのまま家にいたミルキー、三日間くらいおばあちゃんの家にはいたらかされたの。おばあちゃんもそのとき熱もあって容態が酷くて、ミルキーをどうこうする状態じゃなかった。

三日間の間に、ミルキー居なくなっちゃったの。そしておばあちゃんの家壁に、これ見よがしにあの『絵』が描かれていた。みんな覚えてなかったみたいだけど、私ははっきりと記憶に残っていたよ。

警察も絵の意味が分からなかったらしくて、昔みたいに“ただのラクガキ”だとは思ってなかったみたい。繋いでたリードが荒っぽく干切れてて、「噛みきって逃げちゃったんじゃないですかねえ」なんていい加減なこと言ってた。

だから私、自分でミルキーのこと捜すことにしたの。

まずは市の図書館に行つて、七年前の新聞を探してみた。あ、図書館ってすごいよね。十五年も前の新聞まであるんだから。結構探すのに時間がかかった。

それでようやく見つけたの。県の新聞だったかな。割と大きい記事でね、詳細も載ってたんだ。

行方不明になったペットたちの中で三匹は発見されたってさつき行ったよね。そのペットたち、町の路上で見つかったんだって。路上と言っても、野良犬や野良猫が集まるような公園とか神社とか、

ビルの合間の路地裏だとかだったらしんだけど。飼い主たちは自分のペットがお腹を空かせていなかったかと心配していたみたいだけれど、別段やせ細っていた様子はなかったみたい。

ただね、行方不明前と比べて異常なほど凶暴になってたのよ。人間に臆することなく吠えたり、噛みついたり。普通、人間の手から離れた動物って少なからず野生化するものじゃない。そういうものなのかなって記事を読みながら思ったんだけど、どうやらちよっと違うのよ。

——まるで人間を『餌』と認識しているかのようだった。

ここで私、あることを思いついたの。

ペットが消失した場所に残される『絵』の意味。あれは犯人の空腹を意味していると最初は思っていたんだけど、もしかしてお腹が空いているのはペットの方だったんじゃないのか——。

ミルキーもそうなのよ。おばあちゃんが病院に運ばれて三日間も放っておかれたのに、それでお腹が空かない方がおかしいじゃない。それに犯人はつけ込んだのよ。

つけ込むためには、犯人はどういう方法を使ったのかをまず考えた。普通に市販のペット用の餌を使うのもありだけれど、もしかしたらあの『絵』にも意味があるんじゃないかと思ったの。

あの『絵』になんらかの力が——つまり、動物の空腹を呼び起こさせるような不思議な力があるのでは、と。オカルトチックな思いつきでしょ？ でもね、ただのイタズラにしてはあの『絵』ではあまりにも意味が分からないと思ったのよ。

ここまでは推理してみたけど、まだまだ不可解な点があったんだよね。

まず一つ。七年前に途絶えたこのペット行方不明事件が、どうして今更になって再発したのか。

二つめ。犯人は一体何の目的でペットたちを奪い去ったのか。そして何故動物たちは人間を襲うほど凶暴になっていたのか。

最後に三つめ。何故あの『絵』は共感覚者にも伝わるような意味

のある模様にしたのか。

三つとも今だに分からないんだ。分からないけれど、分からなくても捜すことは出来ると思った。過去の事件でペットたちが見つかった場所に行つて回れば何か分かると思ったの。

それで一週間かけて捜し回つて、やつとミルキーを見つけたんだよ。町境のトンネルの上、その山の中でね。まさかあんなところに居ないと思つて、見つけたときはびっくりしちゃった。木に千切れたリードで無理矢理繋がれて、それですごく弱つて、あまりに可哀想だったから、私思わず泣いちゃった。人間を襲うかもしれないって聞いてたからちよつと恐かったけど、ミルキーは行方不明になる前と同じで優しいワンちゃんのままだった。多分、まだ犯人の手がかかつてなかったんだと思う。

ミルキーが戻ってきたのは良かったんだけど、今もモヤモヤしてるの。犯人が見つかつてないってことは、またミルキーが誘拐される可能性もあるってことだし、それに犯人のことが許せなかった。ミルキーはもうお爺ちゃん犬なんだよ。それに私の大事な家族なの。私、犯人のこと絶対許せない。

今までで一番怪談らしくない怪談でごめんなさい。でもね、私みんなの前でこの話をしておきたかったの。

うつん、みんなの前というか、ある人の前で。

実は一人だけ検討ついてるんだ、犯人。ちよつとみんな、騒がないでよ。もし違つたらその人には悪いんだけど。この中に一人だけ『共感覚者』がいること、私知ってるよ。

——とりあえず、ロウソクの火消すね。はい、消した。

矢切くん。あなただけは動じないんだね。ペット行方不明事件の犯人がこの中にいるかもしれないのに。やつぱり、矢切くんが最後に言つてた『やばいことを抱えてるやつがこの中に一人だけいる』っていうの、やつぱりその犯人なのかな？

——そう、だね。うん。そうする。

率直に言うけど、次に語り手として当てる人、私が犯人だと思ってる人だから。

—— ねえ？ 怪談中はちゃんと話を聞くのがルールじゃなかったかな。どうして君だけずっと聞いているふりしてるのかな。実はあんまり聞いてなかったでしょ、私の話。ますます怪しいから止めた方がいいよ。

ね、石立くん。

【？】共感覚 ― 語り手、石立圭介

ああ、もう。

うまくいかねえよお。

何でおれ、毎回こう、うまくいかねえのかなあ。ああイライラする。今までの結局、何するにしてもこうして――。

――なんだよ！ 石立だよ、石立圭介！ もうどうでもいいだろお自己紹介なんてえ！

はっ、小野寺。良かったなあ、大好きな大好きなラブリーワンちゃんが見つかって。

小野寺、なあ小野寺百合。どういうことだ？ 俺はミルクィちゃんのこと救ってやったんだぞ。なのに、なんだよこれ？ 恩を仇で返すのか？

お前らがのうのうと旅行に行つて、ババアが病氣だなんだと言いつけて犬のこと三日もほったらかして。それで俺のことが許せない？

ふざけたことぬかしてんじゃねえっ！ お前らペットの飼い主なんかより、俺の方が万倍動物のこと想つてるね！ お前の自分のこと棚に上げたような態度、マジで反吐がであつ！

はあ、はあ、くそが。

――共感覚う？ そんなもん優れたものでも何でもねえんだよ。

小野寺、おれはお前みたいに、共感覚持ちだつてこと開き直ることなんかできねえ。共感覚者は孤独なんだ。誰にも自分の見る世界を理解されねえ、誰にも意識や感動を共有できねえ。お前言ったよな。『共感覚は特別じゃない』って。

お前、本当にそう思ってるのか？ 本当にお前は孤独感はないのか？

――そうかよ。お気楽なやつだよお前は。

あーあ、もうやめだやめ。仲間捜しはやめ。普通の高校生ぶるの

はやめ。全部やめ。やめやめやめ。あー！

——お前ら。俺がどうしてこんなことしたのか、知りたいんだろ。話してやつてもいいけど、別におれはもう他人の理解なんて求めねえからな。だから文句は一切聞かないからな。

おれはガキの頃からダメダメだったんだよ。頭も悪いし、品性なんかくそ食らえだったし、他人の気持ちなんか知ったこっちゃねえんだ。この際言うよ。おれは世界がイヤで、人間が大嫌いなんだ。

親に反発してばかりだった。おれをこんな普通じゃねえ体質に生んでくれたんだからな。親もおれを嫌ってただろうよ。数字や文字が思い起こしてくれる色に合わせて、色鉛筆で書いたカラフルな読書感想文を見せただけで叩かれたっけな。「どうしていつも普通のことを普通にできないの」だと。

お前らに分かるか？ 共感覚を持った人間の心の内側が。見えてるものが他人と違う。感じたものを他人と共有できない。なんて疎外感だと思わないか。どれだけ孤独なことか想像もできないだろ。

それにつけて、小野寺。お前みたいなのが普通ぶってるから余計に腹が立つんだ。ガキの頃、お前の絵を見たぞ。ありやとても普通の人間には理解できねえ内容だったじゃねえか。あれじゃあおれの『絵』に文句は言えない。あれのどこが普通なんだよ。一般人から見たら幼稚園児の書いた絵の方がまだ理解できるぜ。

——普段おれがこんな風に思ってるなんて想像もつかなかっただろ。おれがただの何の悩みもねえ馬鹿なピエロだとも思ってたんだろ。

その点、動物は正直だ。本能に従順だ。犬は生きるために人間に服従するし、猫は食っていくために適度に人間に甘える。動物は純粹なんだよ。生きることに真面目で、生き物として人間よりずっと生きる価値がある。

なあ、お前ら。もしかして人間が他の動物より崇高で高尚なものだと勘違いしてねえか？

間違いなく思ってるさ、おれら人間は。言っておくがな、人間は生物界で最も強い種族だが、決して人間が他の動物より偉いということはないんだ。お前らは心のどこかで動物を見下してるんだよ。だからおれは、少しだけこの弱肉強食の関係を逆転させてやったんだ。噛みついてくるお犬様お猫様に、人間たちの頭を下げさせてやりたかったんだ。

そこで俺は考えた。まずは動物たちに、おれたちは人間より上だ、と思わせなければいけない。おれたち動物は人間を補食するべき強者なんだ、とな。

そこで、『餌』だ。おれはさらってきた犬猫に人間を食わせた。——どうしてそんなにざわつく。人間だって動物には変わりねえだろお。全ての動物たちが他の動物に食われる危険性を伴っている以上、人間にも食われる危険を平等に持たせるべきじゃねえか。

んで——ん？

——おお、やあつと気づいたのかよ小野寺。

織部は気づかねえか？ お前も小野寺も小学校はおれと同じだったじゃねえか。

じゃあヒント。

餌、あーんど、クラスメイト。

——はっ、気づくのおっせえ。

減ってたんだろ！ クラスメイト、ペット行方不明事件に合わせて失踪してんだろ！ ペットの方はよく調べたと言いたいが、七年前の同時期に起こった『野島小学校連続失踪事件』との関連性は浮かばなかったのかよ！

餌にしたんだよ。学校にはおれの共感覚を小馬鹿にしてくるやつが多かったからな、順に消してやった。ペット行方不明事件・野島小学校連続失踪事件犯人がまさか、当時小学生のおれだとは誰も思わなかっただろ。

そのまさかだったな。小野寺、よく当てたと思うよ。

おれが犯人だと思っただのはあれだろ？

おれはペット行方不明事件の最中、さて次のターゲットはと餌とペットを探してるときに、突然引越すことになったんだ。父親が死にまってるな、一度、となり町の母親の実家に引越して暮らすことになったんだ。母親の実家ではいつも祖父ちゃんがいてな、引越し先の町では計画は実行できなかったんだ。中学は織部たちと同じだったけど、小学校のときは状況が違う。

そこで今年、またこの町に越してきた。好機だったね。これで学校の気に食わない連中を消しやすくなる。

小野寺、お前がおれが犯人だと気づいたのは、この空白の期間の一致だったんだろ。全く、これくらいで気づかれるなんてな。

やれやれ。結局おれは最後までうまくいかねーんだよな。あーあ、ほんと腹立つ。

くそが――。

おおい猫面。もう怪談どころじゃねえんじゃねえか。犯罪者がこの場にいて、さらに自供してんだぜ。

きつとこいつら、今からおれのこと警察に突き出すんだ。ああ、捕まるならいつそ、死刑にでもなりてえなあ。

――は？ なんだよそれ。こんな状況になつてまでも、まだ続けなきゃいけないもんなの？ どうかしちゃってるよ。

――あの絵の謎？ さあね。自分でもなんであるの『空腹』の絵に、あーんな不思議な力があつたのか――。

おれも絵が趣味なんだよ、実は。下手の横好きつてやつでさ。隠れてこそこそ描いてる。おれの絵におかしな力があるって知つたのは、いつだったかなあ？

そう、小学生のときだ。ある日、学校でテストの返却があつてさ。おれは昔っから頭が悪かったから、そのときも点数がダメダメで。それで親にも叱られてさ。いつもの通りよ。

おれは憂さ晴らしに、自分の今の思いをテーマに絵を描いたんだ。テーマは『悲しみ』。

小野寺だったら分かるかもしれない。人の感情には、様々な色や形が見えるんだ。悲しいという感情だと、色は大抵青紫だ。形は時々だな。なんせ悲しいっていうのは色々パターンがあるから。

親がな、おれの部屋を掃除してきたとき、たまたまおれの絵を見たんた。そしたら突然泣き出してよお。「何故私があなたの部屋を掃除しなければならぬの」とか「どうしてあなたはすぐにものを散らかすの」とかさ。普段そんなことじゃ——まあ注意くらいはしてくるけど、泣き出すなんてのは異常だ。

半年、一年と経つてようやく気付いたんだ。俺の絵は不思議な力を持っている。どうやらおれの絵は、直に見ないと効果を発揮しないらしい。写真でも、テレビ越しでも駄目だ。そしてもう一つ。効果が現れるのは絵によってまちまちで、人によっては効果が出たり出なかったりするんだ。例えば、ある奴に『笑い』と『落胆』と絵を見せたとする。そいつに『笑い』の絵を見せるとぴくりとも反応しないんだが、『落胆』の絵を見せるとひどく落ち込んだりする。逆に、違う人間に『笑い』を見せるとアホみたいに笑いだすが、『落胆』を見せても全く反応が見られないんだ。ここの基準はおれでもよくわからん。

ただ可能性として言えるのは——そうだな。その人間の心理状態に最も近い絵を見せると効果が現れるってことだ。なんとなくそう確信している。

おれはそれを頼りに、動物を使ってこの計画を起こすことにした。人間を餌にして犬猫を呼び出したい。それにはまず『空腹』の絵で動物の興味を惹くのが最適だと思ったんだよ。そこで町中の腹を空かせたペットたちをターゲットに、ってことさ。面白いほど上手くいったぜ。

——くくつ、睨むなよ小野寺。ミルキーちゃんは何ともなかったんだろ？ 結果オーライじゃねえかあ。

——信用できないか。おれの絵の力。

ふーん。まあ、別に信じてもらおうとも思わないけど。

……。

そうだあ。いいこと考えた。

今からお前らに絵を見せてやるよ。お前らの今の心理状態、結構一致してるはずだ。

ふひひ、見てろ。すっげえ面白いことになるからなー！。

終了だ終了、こんな下らん怪談コーナー。何が幽霊だ、何が心霊現象だよ。現実になんもんあるわけねえ。本当の恐怖は人間にあるってこと教えてやる。

本物のバトルロワイアルだ。おれ、あの映画好きなんだよな。不条理な世界観で人を人とも思わない残忍さ。おれも一度ああいうの見てみたかったんだ。お前らで実現してやる。お前らの肉も全部町の犬猫に食わせてやるからな。

死ね、死ね！ みんな死んじまえばいいんだ。お前らみたいな偽善者が一番気に食わないんだよっ！

——あ？

おい、なんだ、火を消すなよ。

何も見えねえ。何も見えねえぞ。おい！ 灯りをつける！ 絵が描けねえだろうが！

おい！ てめえか猫面！ 語り手の邪魔をしてはいけないうってルールはどうした！

——なっ。そんなもん、今更まかり通るかよっ。聞いてない、そんなの！

なあ、おい。何なんだよ、なんだこの変な奴らは。ど、どっから沸いて出てきた。

まあおい、やめろ。やめろって、な。

やめろ。やめろおおっ。

ちよ、ちよっと——。

……。

猫面の語り 其の参

あらあら。石立くん、壊れちゃったのかしら？ 何にも言わなくなっちゃって。さつきとは打って変わって、お人形さんのようだね。

——あたし？ ここで起きる出来事全てをあたしに訊かれても困るわ。お門違いだもの。

いいかしら。あたしはただの『案内人』であって、『彼ら』と直接繋がっているわけではないのよ。

——異常現象？ その表現は違うわね赤羽ちゃん、これは別に異常現象ではないわよ。そもそも異常現象とは決して遭遇しえないことじゃない。

年に一度しか起こらないことを『珍しい』とするならば、十年に一度、百年に一度しか起こらないことを『異常』と言うんじゃないかしら。石立くんがああいう風になったのは異常でもなんでもなくよくあることなのだよ。

いいかしら。彼らはこの拘置所にやってくる人たちを選別するのだわ。気に入った者は受け入れ、気に入らない者は排除し、そして——どうなるのかしらね、うふふ。それは石立くんを見てもらえばよく分かると思うわ。

それにしても、まさか彼の『絵』に反応するとはね。本当に彼、こういうこと以外に自分の才能を生かせなかったのかしら。

——石立くんがどうなるか？ さあね。少なくとも貴方たちが気にする必要はないんじゃないかしら。ただ黙って眠っているとも思ってもらえれば。

ちよつとは落ち着きなさいよ貴方たち。やかましいっいたらありやしないわ。小野寺ちゃん。貴女も貴女ね。わざわざこんな場で事を荒立てようとするんだから。見なさいよ、こういう事になるんだから。貴女、今日は普通の怪談話も用意してきたんでしょ？

——まあ、もうなってしまうたものはいいのだけど。

人はこうした特異な場所では多少なりともおかしくなってしまうわよね。仕方ないといえば仕方ないのかも。

はいはい、みんな静かに。静粛にしましょう。あらあら島田くん。この部屋から出ていくのは勝手だけれどね、彼らはどう思うかしら。これ以上拾参怪談の決まりごとに背くのがよくないということ、分かるわね？

——やっと落ち着いてきたわね。全く貴方たちは。拾参怪談の歴史もそこだけど、貴方たちのように手のかかる子供たちも珍しいわよ。あたしの好きな冗談も言えないわ。はあ。

あたしはね、貴方たちに普通の怪談話をしてほしいのよ。それだけでいいじゃない。それだけで楽しいじゃないの。この拘置所の人たちだつてそれを望んでいるはずだわ。もう、あたしにこういうことばかり言わせないで頂戴。慣れてないんだから、お説教は。

——あたし何だか疲れちゃった。貴方たちもそうでしょう？ 休憩にしようよ。皆、おやつでも食べてなさいよ。こんなところで食べても美味しくないでしょうけれど。

あら、それは何かしら佐野ちゃん。

——じゃがりこ？ なあにそれ、お総菜？

何よ、そのおかしなものを見るような目は。あたしはね、ずうつとこの拘置所にいるのよ。知らなくて当然でしょう。怒るわよ。

あら、お菓子なの。へえ。

——いえ、いいわ。食べようつたつて、このお面をとらなくてはいけないでしょう。素顔を見られたらあたしのミステリアスさが瓦解してしまうわ。

——お面の隙間から？ うーん、それならできないことはないけれど。じゃあ、ひとつ頂けるかしら？

——ううん、固い。なによこのお菓子。固いじゃない。歯が折れちゃいそうだわ。最近の子供は歯が丈夫なのね。

じゃあ、これは何？

ポテトチップス？　ひとつだけ頂戴な。

——しょっぱい。ちよつとこれ、塩を振りかけすぎじゃないの。やんなっちゃう。というか、貴方たちのおやつって塩っぱいものばかりだわね。こんなのおやつじゃないわよ。甘くてとろけそうなものがいいわ。

——あら、島田くん、それはまさかチョコレートじゃないかしら。それなら知ってるわよ。甘くて美味しいわよね。あんまり食べたことないけど、あたし大好き。

しかもこれ、たけのこの形してるのね。可愛い。ひとつくださる？

——あ、これは美味しいわ。そうそう、こういうのをおやつというのよ。島田くん、貴方は男の子なのに、こんな女の子みたいなお菓子を食べるのね。甘くて、可愛くて、美味しい。意外だわ。

ふふ、ごめんなさい。気分を悪くしないでちょうだいね。冗談だよ、冗談。あたしだってそれくらい分かるわ。今は男性でもこういうのを食べるのよね。

それより、ねえねえ。

それ、もう一つ頂けないかしら？

——あたしとしたことが意地汚かったわ。人のものを見境なくいただくなんて、恥ずかしいことだわ。だって今のお菓子ったら美味しいんだもの。みんな面白い形してるし。でも、いい大人が本当に恥ずかしいわ。

——見た目は子供？　うるさいわね。これでもとつくに成人してると言ってるじゃない。あたしから見たら貴方たちの方がよっぽど子供だわ。

あ、これありがとうね赤羽ちゃん。カントリーマアムだったかしら。箱ごと頂けるだなんて、感激。あとで美味しくいただくわね。

さて、おやつ時間はもうお仕舞。お菓子に夢中で小話のひとつもできなくてごめんなさいね。

そろそろ怪談の続きをしましょうか。石立くんはご覧の通りだから、案内役であるあたしが次の語り手を指名するわね。

次は信条あずみちゃん、お願いできるかしら。さっきは不安そうにしていたけれど、休憩を挟んで大分落ち着いているようだし。

では、お願いね信条ちゃん。

【玖】ガラガラ ― 語り手、信条あずみ

信条あずみです。

前口上になりますけど、今日は私をこの肝試しに誘っていただいてありがとうございます。私、普段は習い事ばかりで、その影響で友達も少ないし、ましてこんな夜中に遊びに出かけることなんてほとんどなかったんです。

――堅苦しいですか？ ごめんなさい。私、昔からこんなんで。あはは、だから友達できないのかな。

ともあれ、誘ってくれてありがとうございます。織部くんでしたっけ、この肝試しの主催者。

――あれ、違う？ 私、てっきり織部くんが主催したものだとは。つまり。

じゃあ、誰なんでしょう？

――すみません、面倒くさい疑問を浮かばせてしまって。石立くんのこともあったのに、またみんな混乱しちゃいますよね。

何かの手違いかな？ 言い出しつpegいないだなんて――。

――ともかく主催者は不明ということで、早速怪談話を始めますね。

これは私の家で起こった、私が小さい頃の話です。

私の家、見た目は時代劇に出てくるような武家屋敷のような造りで、戦前に建てられたようなかなり古い家なんです。僭越ながら土地もかなり取らせて頂いて、家中全ての部屋を私自身把握していないほどなんです。把握していないというのは、ただ広いというだけではなく、使わなくなつて施錠されている部屋もあるから、というのがありますけれど。

その使われなくなつた部屋の一つに、いわゆるいわく付きの部屋

があることを、当時幼かった私は知りました。私の家では数人の家政婦さんを雇ってしまして、その方たちが噂していたのをこっそり盗み聞きしてしまったのです。

噂によると部屋は古くから『ガラガラ』という俗称で呼ばれているらしく、使われてない部屋というよりは、入ってはいけない禁じられた部屋という扱いであるようでした。私、それを家政婦さんたちの噂で知ったのは十歳かそこらだったんですけど、そんな部屋があるなんてそれまで知らなかったんです。

幼かったためにその部屋に対してそれなりに好奇心が沸き、一度でいいからどんな部屋なのか覗き見てみたいという思いがあったのですが、それでも我が家では特に父が厳しくて、『ガラガラ部屋』に興味を持つ私に対して、父はこう言いました。

「あの部屋は俺も入ったことがない。そもそも代々から禁じられた部屋に自ら進んで入るうとも思わん。いいかあずみ、禁止されているということはつまり、それを破ればそれなりの懲らしめが待っているのだ」

父はそれだけ言い、その部屋の詳細については何も触れませんでした。しかし、私はあの部屋に入ったらどうなるか、それだけ理解しました。

父は『懲らしめ』という言葉率先して使います。懲らしめは罰とは違うからです。一度の過ちは『懲らしめ』、二度の過ちは『罰』と、そういう風に使い分けていました。罰は罪人が負うものであり、つまり同じ過ちを二度犯せば罪人扱いで裁くぞ、という父の無言のメッセージなんです。

ならば、と私は考えました。二度が駄目なら、一度だけならいいのではないかと。父の昔からの教えを逆手に取ろうとしたのです。『懲らしめ』ぐらいなら覚悟して実行に移せるという考えでした。今思うと、とても親不孝な考えだったと思います。

そこで、まずはその『ガラガラ』という部屋がどこにあるのかを調べなくてはなりませんでした。

当時、幼い私と一緒によく遊んでくれた家政婦さんがいました。

名前は吉原香苗さんといいます。二十代前半くらいの若い家政婦さんで、ぼつちやりした人懐っこい顔で、私のお気に入りのお気配の家政婦さんでした。性格は気弱で、とにかくマイペース。仕事の方はあまり芳しくない方だと思われていたらしく、一日の大半は私の遊び相手として過ごしました。

『ガラガラ部屋』の存在を知った次の日、私は早速その吉原香苗さんにその話題を切り出してみたのです。

「香苗さん、この屋敷って、禁断の部屋があるんだよね？」

「禁断の部屋、ですか？」

香苗さんはぽかんと口を開けて首を傾げました。ピンと来ないように、彼女は恐る恐る尋ね返してきました。

「もしかして、旦那様のお部屋のことでしょ？ いつも『俺の部屋には絶対に入るな。掃除なら俺自身でやる』と厳しく言いつけられていますので……」

私は呆れてしまいました。他の家政婦さんたちの間ではその噂が流行していたというのに、彼女は本当に『ガラガラ』を知らなかったのです。彼女はもしかして他の家政婦さんたちから仲間外れにされているのではないかと、少し心配にもなりました。そこで前日に盗み聞きした家政婦さんたちの噂話をたよりに、それを香苗さんに教えてあげました。香苗さんはそこまで興味が沸いてこないのか、ひたすら「へえ」とか「うんうん」とか、気のない頷きをするばかりでした。

私が「面白そうだからさ、そのガラガラ部屋がどこなのか突き止めて、二人で入ってみようよ」と私が言うと、香苗さんはすぐに顔を青ざめさせました。

「で、でも。旦那様にも入っては駄目と言われているんですよ？」

「なら、絶対に入るわけにはいきませんよ」

「もう、一回だけなら大丈夫だってば！ ねえお願い。香苗さん、ちよつとだけだから、ね？」

私は当時、気が強かったというか、相当わがままな子供だったので、嫌がる香苗さんを無視してそう頼みこみました。

香苗さんは「でもなあ」、「えーと、えーと」とよく分からない返事ばかりだったので、痺れを切らした私は無理矢理香苗さんを『ガラガラ部屋探検隊』の仲間へと加えたのでした。

今思うと、本当に香苗さんには申し訳ないことをしたと思っています。それはもう、謝っても謝りきれないほどに――。

私は香苗さんに「他の家政婦さんたちからもつと情報を集めてきて」とお願いしました。結果はいまいちです。香苗さんは思った通り他の家政婦さんたちから仲間外れにされていたようで、香苗さんが話しかけても「何の用？ あなたはさっさと仕事に戻ってちょうだい」と突っ返されるだけでした。私が直接家政婦さんたちに尋ねてもよかったです。香苗さん以外の家政婦さんにそれを訊けば、父に告げ口される恐れがありましたので、泣く泣く止めておきました。

それでもある日、ようやく一つの情報を得ることが出来たのです。家政婦さんたちの噂話を、たまたま香苗さんが陰から聞きつけたのです。

どうやらガラガラ部屋は東の倉庫の地下にあるらしい、ということでした。

香苗さんからそれを聞いて、「嘘でしょ？」と私は目を丸くしました。平屋一階建てだと思っていた我が家に地下があるなど、本当に初耳だったからです。

「で、でも、私にはたしかにそう聞こえました」

「ふうん。でも、うちに地下があるだなんてますます面白そうだね」

ガラガラ部屋の話香苗さんとするとき、必ず私たちは私の部屋でひそひそと話し合いました。二人だけの内緒話ということで、ますます私は胸を高鳴らせました。

対して香苗さんはガラガラ部屋の話をするとき、いつも表情を強ばらせます。他の人に聞かれて叱られるのを恐れていたのです。このときはいつもより一層顔をひきつらせていました。

「あずみちゃん、もうガラガラ部屋は諦めませんか？ 私、何だか怖くなってきました、地下だなんて。だって、お化けが出るかもしれないですよ？」

「お化けが出るといふのなら、それはそれでいいじゃない。その方が面白いし」

「そ、そんなあ」

「やつぱりさ、地下に入るには鍵があると思うんだよね」

「そうですね、禁じられた部屋に鍵がかかっていないとは思えませんが」

次に、私はとんでもないことを香苗さんをお願いしました。

「ということで香苗さん。お父さん部屋からさ、地下の鍵見つけだして盗もうよ」

香苗さんの顔が、さらに濃く青ざめました。即座に「無理です、絶対にそんなことできません」と、首と両手を大げさに振りました。屋敷中の鍵は家政婦長さんが管理していますが、使われていない部屋、もしくは禁じられた部屋の鍵は父が所有していました。

父は昼は仕事に出かけるため、父の部屋は普段施錠されています。なので家政婦さんたちが父の部屋に入ることは出来ませんが、私たち信条家の人間は違います。何かあったときのため、母と私だけに父の部屋の鍵を渡されているのです。私は自分の立場を利用しました。

その日、父が仕事に出たあと、早速早苗さんと父の部屋に侵入しました。私も滅多に父の部屋に入ることはありません。父の部屋に入るには、父の許可が必要だったからです。父が居ない場合はメールを送り、了解の返事がない限り勝手に入ることはできません。勝手に入ったことが分かれば『懲らしめ』が待っています。

まるでスパイにでもなったような気分です。このときの緊張感は、

たまらなくスリリングで楽しいものでした。

香苗さん抜きで私一人で父の部屋に入ってもよかったのですが、彼女も『ガラガラ部屋探検隊』のメンバーでしたので仲間外れにするわけにはいきません。それに二人で探した方が効率が良いと思っただです。さつさと探さねば他の家政婦さんに見つかってしまいかねません。

父の部屋は敷居をまたいで地続きの二部屋、書斎と生活部屋の構成です。私は書斎を、香苗さんは生活部屋を探しました。

鍵箱は生活部屋の方にあつたのですが、箱の中に東倉庫地下のものとおぼしき鍵はありません。地下への鍵は、書斎机の引き出しの一番下にありました。もつと厳重に保管されていると思っていたので、若干拍子抜けです。私たちは東倉庫の鍵と地下の鍵を持ち出し、父の部屋を出てました。

私の部屋に戻ると、私たちは早速これからの作戦を立てました。作戦決行はその日の晩です。

深夜一時、皆が寝静まつたのを確認したあと、私と香苗さんは敷地東の庭に集合しました。

敷地内には本家の他に、分家、東の倉庫、西の倉庫、家政婦さんたちが寝泊まりする家政婦寮があります。家政婦さんたちの就寝時間は夜の十一時と決まっていましたから、香苗さんにはこっそり抜け出してもらったのです。

香苗さんの顔は相変わらず真っ青でしたが、私は沸き上がる緊張と興奮を抑えられませんでした。もしばれたら香苗さんがクビになつてしまうかも、なんていうのはこのときは微塵も考えませんでした。

東の倉庫には信条家の家宝や書物が大事に保管されていましたので、予備の掃除道具や庭の整備道具が入れている西の倉庫と比べるとほとんど入ることはない所です。入るとしても、月に一度の大掃除のときぐらいでしょうか。しかも入ることを許されているの

は父と母、そして家政婦長さんぐらいのものです。信条家とは言え、子供の私に入るのは許されません。

流石にここに入ったことが分ければ、たとえ一回でも『懲らしめ』では済まないでしょう。そういったものも含め、私は興奮していたのでした。

西の倉庫に比べ、東の倉庫の防犯対策は強固です。鍵が三つも取り付けられた分厚くて堅牢そうな扉が一つ、あとは裏に鉄格子のなかった極小の小窓があるぐらいです。盗まれて困るものがあるということは見てとれます。

今時のセキュリティシステムが作動しないか、それだけが不安でしたが、鍵を開けて中に入っても何も起こらなかったので、ひとまず安心しました。当時の私の家の防犯もまだまだでした。十歳の子供と下っ端家政婦がタッグを組んだだけで看破されてしまうのですから。

東の倉庫のものは、どれも頑丈そうな箱や金庫に保管されていました。どれも古くさいダイヤル式のものでしたが、暗証番号が分からない限り開くことはできません。家宝とやりに少し期待していたのですが、目的は家宝ではありません。ガラガラ部屋です。

地下という噂だったので、二人で懐中電灯片手に地面を調べ回ったのですが、いっこうに手がかりは見つかりません。ふと、香苗さんが何かを見つけました。

「あずみちゃん！」

「香苗さん静かにしてよ。みんな起きてきちゃうでしょ」

「す、すみません」

香苗さんは面目なさそうに俯きました。懐中電灯で香苗さんを照らすと、香苗さんが片手に何か持っているようでした。

「それ、なに？」

「あ、そうです、これですこれです」

香苗さんが見つけたのは一冊の日記帳でした。しかも作りが今のものではなく、かなり古そうな装丁です。

表紙の隅には『みや子』と丁寧な字で書かれていました。どうやらみや子という女性の日記帳のようです。

二人で日記帳の内容を読んでみることにしました。読んでいくとみや子という女性は、昭和初期、つまり戦前にこの信条家で働いていた家政婦のようでした。内容は日々の事務に関してだとか信条家の内部事情ばかりで、特にこれといって変わったものはありません。文体も古く、かなり読みづらいものでした。

「どうしてこんなもの持ってきたの？」

半分ほどまで読んだ私は、だんだんこのつまらない内容に飽きてきてそう尋ねました。香苗さんはおずおずと答えます。

「い、いえ。こんな大切なものばかり所蔵された場所に、こんな一家政婦の日記があるなんておかしいなあ……」

なるほど、と思いました。もしかしたら『ガラガラ』と何か関係のある女性なのかもしれない、と。

日記の半分まではごく普通の家政婦の日常ばかりでしたが、後半からは気になる点がいくつもありました。

ある日にちの日記の内容が、たしかこうです。

——今日、誠次郎様に、お前はよく見れば綺麗な女ではないか、
と言い寄られた。

——今日、誠次郎様に尻を撫でられた。

——今日、誠次郎様の部屋に呼ばれた。夜酒に付き合ってほしいと誘われたが、立場もあるので丁重にお断りした。

——今日、誠次郎様に無理矢理部屋に連れ込まれた。胸などをひたすらまさぐられたが、本当のことをいうと、それほど悪い気はしない。

実際は堅苦しい文体でしたが、口語体に要約するとこういった内容だと分かりました。誠次郎とは、当時信条家の婿養子として迎えられた方のようにでした。

そうです、不倫です。

私たちはその内容に息を呑みながらも読み進めました。

——お前は綺麗な声をしている、おれが最も好きなのはお前の美しい声だ、お前の声はどんなオーケストラの楽曲よりも艶やかなのだ、と誠次郎様がこれ以上ないほどの賛美を下さった。

手にびっしょりと汗がにじんできました。その記述のわずか二日後、恐るべき内容が記されていたのです。

——今、誠次郎様と共に東倉庫の地下に幽閉されている。誠次郎さんのご子息に私の日記が見つかったのです。雪崩れのように信条家全体にこの不倫が発覚していった。全て終わりです。この日記帳と一緒に、私と誠次郎様は罰としてここに入れられた。章蔵様は、自分の日記を見返し、自らの愚かさに気づくがいい、と言った。

章蔵とは、当時信条家の黒柱であった人です。私は一度、信条家の家系図を見たことがあったので、名前だけはちらりと見た覚えがあります。

——今日、章蔵様方がここへ見えられた。使いに両手を掴まれ、おぞましい造形をした拷問器具を当てられ、喉を潰された。恐らく日記の内容を読み、誠次郎様の前で私のこの声を奪ってやろうとしたのだろう。

——幽閉されて、もう四日が過ぎた。食事はおろか、水すらも一切与えられていない。誠次郎様などは今朝からぐったりして一言もお言葉を発しない。このまま私は殺されてしまうのだろう。

監禁四日後。ここまでくると、もう字が震え切っていて全てを読むことすら困難でした。

——何故でしょう。何故誠次郎様だけが解放されるのだでしょう。監禁五日後、日記の一文目がそうでした。二行目以降はもはや読めたものではありません。鬼気迫った切迫した文字の羅列です。みや子さんの恨みつらみを述べたものだということは、かろうじて読みとれたのですが。

「や、やつぱりみや子さんって方の霊ですよ。地下に行ったら、きっとみや子さんの怨霊にとり殺されちゃうんです」

香苗さんはいよいよ泣き出しそうな声でそう漏らしました。私も

少しずつ恐怖感がこみ上げてきたのですが、それでもまだ好奇心が勝っていました。それに、ここまで来てすこすこと帰るわけにはいかないと思ったのです。

一人だったら多分、そこで恐ろしさに耐えられず逃げ出していたんでしょうけれど。

泣き出しそうになる香苗さんを励まし、それから私たちは探索を再開しました。

決定的な手がかりを見つけたのは、またしても香苗さんでした。地下への入り口らしきものを見つけたと言うのです。見ると、入り口らしき取っ手が箱の間からちらりと覗いていました。二人で協力して荷物をどかすと、やはりそれは入り口のように見えました。

鍵は鍵穴にずっと入っていきましたが、錆びているのか、回すのに一苦労しました。それでもなんとか開錠することができました。

思った通り地下部屋への入り口のようなでした。そこには正方形の穴がぽっかりと空き、木製の梯子が掛けられていたのです。穴からはひゅうひゅうと冷たい風が吹き出し、ぶるっと腕が震えました。地下にはどこか風穴でもあったのでしょうか？ 地下へ降り、当たりを照らしたのですが、それらしきものは見あたりませんでした。

地下部屋は狭く、鉄格子の牢屋らしき場所が三つあり、それが部屋の八割のスペースを埋めていました。壁も土のゴツゴツした肌が剥き出しで、冷たく暗い印象受けました。牢屋の奥を照らすと、両足を拘束するものでしょうか、長めに伸ばされた二本の鎖に、先には錆びた鉄の輪がありました。これにみや子さんと誠次郎さんは繋がれたのかと想像すると、背筋が凍るような思いでした。

牢屋の扉がキィキィと音を立て、小刻みに揺れています。一体どこから風が吹いているのだろう。それより、ここの明かりのスイッチはどこにあるのだろう。私はまた懐中電灯の明かりを巡らせました。

「香苗さん、ここの電気のスイッチってどこかな？」

返事がありません。また不安がこみ上げてきました。風の出所や

明かりのスイッチなどにより、一人つきりにされる恐怖の方が圧倒的に勝りました。

香苗さんは部屋の隅っこでうずくまりぐずぐずと泣いていました。よかった、香苗さん逃げたわけじゃなかったんだね、とひとまず安心です。

「もう、いい大人が泣かないでよ」

「嫌です、もう帰りたいです、ここ怖すぎますう」

香苗さんの悲壮感たっぷりな泣き言を聞いて、少しだけ緊張がほぐれました。もしかしたら香苗さんが霊にとりつかれて私に襲いかかってくるかも、なんて想像していたからです。

香苗さんがいつも通りでよかった、そうほっと胸をなで下ろした――そのときです。

チャリ、と小さく金属音がかすかに聞こえたのです。それは私のすぐ左、牢屋の奥からでした。私はとっさに牢屋の方へと光を向けました。

「ひっ」

光が、通らなかったのです。懐中電灯をそこへ向けているにも関わらず、ある一部だけ、ぼうつと薄暗いまま浮き出ていたんです。

チャリ、チャリ、カチャリ。

そう、その影はまるで、人の形のような――。

私が悲鳴を上げるより先に、それに気付いた香苗さんが真っ先に叫びました。そこでぼうつと影を見つめていた私は、はっと我に返ったのです。

逃げよう、そんな考えが閃光のように頭中駆け巡りました。

私は香苗さんの手を握り、一気に梯子の方へと走りだしました。後ろでホラー映画のように地下の扉が閉まらないか一瞬危惧しましたが、そんなことはありませんでした。

梯子を上る途中、後ろで『ガチャーン!』と思い切り鎖を引っ張る音が鳴り、梯子を掴む手を滑らせかけました。それを聞いた香苗さんなどは悲鳴を泣き声へと変えていました。

地下を出た後、すぐに倉庫の扉へ走ろうとしましたが、あることに気付いて駆け出す香苗さん呼び止めました。

「香苗さん！ 地下の扉閉めないと！」

「な、なんでですかぁ！」

「扉閉めて霊を封印するの！ 地下から出てきて呪い殺されちゃうよ！」

私は心霊番組の見過ぎだったのかもしれませんが、でも、そうせすには逃げることも出来ませんでした。嫌々ながら香苗さんが戻ってきて、私は地下扉を閉めようと思いました。

「あれっ？」

取っ手を持った瞬間、あまりの感覚に思わず声を上げました。扉が、重くて動かないんです。ポケットから鍵を取り出した香苗さんも異変に気付きました。

「動かないんですか？」

「か、香苗さん手伝っ……！」

言いかけて、右手に締められるような痛みを覚えました。ぐつと、何かに手首を掴まれているようなのです。何に掴まれたのかは分かりません。懐中電灯でそれを照らす勇気が、私には到底なかったからです。

それから地下の暗闇から、地面を震わせるような声が鳴り響きました。アアア、という、瑞々しさの欠片もない——ひび割れたような掠れ声でした。

みや子だ！ 直感で分かりました。

ここで私はようやく理解したのです。この地下部屋が『ガラガラ』と呼ばれているのは、『喉を潰されたみや子の声』に由来しているのだと。

あまりの出来事に、ついに私も泣き出してしまいました。掴まれた手はいっこうに離してくれないし、地割れのようなみや子さんの声も絶えず耳を触ってきます。

しかし、そのときでした。

「あずみちゃんを離してっ！」

香苗さんが、普段からは想像もつかないような怒声を上げたのです。その瞬間、私の手首を掴む感覚と、例のかすれ声は火の粉を散らすように消失しました。反射的に扉をボタンと閉め施錠します。倉庫の扉もしっかり締め、私たちは死にもの狂いで屋敷へと駆けていったのでした。

翌日、私たちは二人して39度の熱を出して寝込みました。そうです、声なんかもう出なくて、彼女——みや子さんのようにガラガラで。

まあ、それが本当にみや子さんのせいだとは言い切れないんですけれど——。

あの日、香苗さんがさんざん叫んだので誰かに気づかれてないかビクビクしていましたけど、しばらくは大丈夫でした。でも、私たちはあることを見落としていたんです。

それから、二週間ほどしてからでしょうか。父が激怒しながら家中の家政婦さんたちを屋敷の大広間に集めました。

父がふと、東の倉庫を整理しようとしたそうで、それで気付かれてしまったんです。この中に倉庫に盗み入ったやつがいる、と犯人探しを始めていました。私は襖の間からその様子を覗き見ていました。一番後ろに、香苗さんがいました。彼女は顔を伏せカタカタと小刻みに揺れています。

結局、その収集で犯人は見つかりませんでした。

その後香苗さんが私の部屋に来て、「ばれたらクビになっちゃう」と泣き出しました。私はきゅっと瞼をつむりました。私も父に真実を知られるのが恐ろしかったのですが、全ては私の責任なのです。

後日、私は父に告白しました。

「ごめんなさい。東倉庫に勝手に入ったのは私です」と。

「他に一緒に入った者はいないか？」と父は尋ねましたが、香苗さんに責任を分担したい気持ちをごつとこらえ、「私一人です」と答

えました。

それから三時間は叱られました。でも、本当に『懲らしめ』で済んだんだと思います。

私、そのとき思っただけです。信条家から代々伝わる子供のしつけ方、一度目は『懲らしめ』、二度目は『断罪』というものです。『ガラガラ』の事件が起こったあと、信条家では二度目の過ちを『断罪』、つまりその『断罪』とは、みや子のように地下の牢屋に閉じこめるぞ、という戒めなのではなかいかと――。

香苗さんにはひどく感謝されました。それも泣きながら。結構泣き虫な人なんです。

今もたまに香苗さんと一緒に外へ出掛けたりしてますけど、あの日の事は決して話題にはしません。恐らく、信条家の悲惨な過去を知っているのは父と私と香苗さんだけなので、お互い、あの日のことなんて綺麗に忘れてしまいたいですけど。

もう二度とあの地下の牢屋には入れません。入りたくもありません。みや子さんにはもう会いたくないし、まして、二度目の過ちであの牢屋に閉じこめられるんだと思うと、恐ろしくてたまらない思いですから。

これで私の怪談は終わりです。

怖かったですか？ 話下手ですみません。しかもやけに長く話し込んでしまっただけです。

――では、火を消しますね。

ロウソクの火も大分減ってきましたね。猫面さんが持つてる火も合わせて五つ。

ところで、今何時なのでしょう。暗く腕時計も見えにくいですし、携帯の時刻表示もなんだかおかしくて――。

――えっ、皆さんもそうなんですか？ あはは、これも霊現象だったのでしょうか？

あ、次の語り手さん指名しますね。

——津田さん、お願いします。

ようやく来たかつて感じですよ。ここまで来ると最後を締めるのが誰か気になりますね。

では、頑張ってください津田さん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4274m/>

拾参怪談

2010年12月20日19時55分発行